

身の上で老年に至りて難するもの樂あり始めに難辛苦として後に安樂あ身の上となる  
ものがありますこれは佛説に言ふ因縁で御座いましてこれは有りは何いふ事の解りませ  
ん間が好と好事ば有りて間が悪いと悪い事ば有りあるもので運のいゝ方は頼んだと思へ  
ば札と拾ひ川へ落ちてガバ／＼して居ると金側時計と拾ふやうな事があり又間が悪いと途  
中で小便が出たくなつてア、何所の小便所があれば好いと思ふと幸ひ三正立ちの雪隠が  
あるから入らうとすると皆な穢れひとして寒がつて居たり横濱へ往くのには流車に乗ふと思  
て大急ぎで人力車で停車場へ駆け付けけると流車がヒイと出て往てしまつたり天氣が好と思  
つて合羽と脱いで外へ出れば雨が降つて来たり業者と買へばフツ／＼と憤てば有り居たり總  
て十分にいらんもので御座いませ多介のやうな好人は神も佛も附法で居るうと思ふと前回  
に申上たやうも難澁な目に遭ひ自分が率馴れた馬に別れと告げて漸く岩上へ掛りませと  
胡麻の灰道連の小平と仁介に會て土足に掛けられ抜刀と附付けてサア金と出さなければ殺  
せよと云ふので多介は青くあり筆と合せ何卒免しておくんさい裸體にても何にでもなる  
うらと云ふのと耳にもおけず 小平「仁助御いでしまへと云ふので多助の衣服と剃きませと



替て居るのの袍太布子でハツタリと落ちたのの六百文 仁「哥々眞實よ六百しかねへせ 小  
 手前眞實よ六百しうねへのか縁起が悪い夜が明けてしまふ起ろ〜と云りれ多助の裸體  
 で小平を拜みますと 小「縁起が悪い奴だと云いながら今多助が起さ上らうとする所を土足  
 で胸を蹴たうら後ろへ逆さま利根の枝川の流れへドブウンと落ちまして多助の流されまし  
 たが川が浅いうら漸くの事でも運上つて来ますと兩人の者の居りません着物のあし六百文の  
 錢の差が切れ彼方此方へ散乱致して居りますのを拾ひ集めて漸く四百幾文五百に足りない  
 錢を是れでも命の綱と思ひ都部濡れよなつて前橋の手前まで来ると少し日がわたつて来ま  
 した旭のさすの裸體でも歩けないから宿の取付に古着商がありますうら百五十文を出し  
 て襦袢を一枚買つて帯がないから繩を締め餘る錢で木賃宿へ泊り四日路掛つて漸く江戸表  
 へ着きました其頃只今と違つて路が難詰で御座いまして殊に多助の江戸の勝手を知り  
 ません何處と云て便る所がないが江戸と云ふ所の主庵と云ふものがあつて奉公人の世話を  
 するそらだかそれより受人がなければいけませんと思ひ風と考へ付たのの十四年前に別れた  
 實父鹽原角右衛門様の阿部伊豫守様の御家來であつたのが浪人して後ち戸田様の家來にな

つて居るとの事ゆゑ尋ねて往て頼んだら受人位にはなつて呉れるだるう實の阿母様や親父  
 様はお達者でお出でなさるの下新田へ養子に往てうら便りもしないが何なすつたの逢ひた  
 い事と思つて筋違橋の戸田様の前へ来て通用門へ掛ればいゝに知りませんのら表門へ入り  
 お役人の居る所へオマ〜の姿として参りまして 多「ハイ御免なせい 役「何處へ参るのだ  
 物賃ひならあちらへ行け〜 多「ハイ少々物が承りとう御座います 役「物が聞たけれ  
 ばお辻へ往け何んだ乞食みたやうな姿として 多「これら乞食になればなるんだが未だ乞  
 食にゐるんねへアノ戸田様の御屋敷は此所であんすうへ 役「戸田様の屋敷は此方だ 多「う  
 れでは十四年前に此方へ抱へられた鹽原角右衛門と云ふ方がありやんその 役「ナコ鹽原ハ  
 イ渠れば十三年前にれ國詰めに成て此の屋敷には居らん 多「お國は野州の宇都宮でがんと  
 ろ 役「前は宇都宮であつたが松平主殿頭殿とお國換へになつて今では肥前の島原だ 多「へ  
 イ肥前の島原と云ふ所は遠ふがんとその 役「さう島原までは三百一里半あるナと云はれて  
 多助は叱驚致しヘアと云ひながら思はず知らず此處へ泣き倒れました 役「コレ〜彼方へ  
 参れ〜 多「ハイ〜腹ア減らして還ひ残しが二十八文字都宮なら食はずあても往く



が三百里のちやア仕様がねへ 彼グツク云ふな彼方へ行け 多「ハイ参りやすと言ながら出掛けました頼みの綱も切れ果てこれから先きは飢餓で死ぬより外に仕様がないと覺悟を極め何か知れないやうに淵川へでも身を投て死なうと思つて日の暮れるまで彼方此方と迂路く歩いて駿河臺の織田姫頼荷の所へ参ますと最も腹が減て歩けません其内に雨がポツウリくと降て参りますから駿河臺を下りて昌平橋へ掛りました此昌平橋は只今は御成道の通りへ架つて居りますが其頃は萬世橋の西に在りましたので多助は山川しで御座いますから頼と勝手が知れません 多「死ぬべいが此川は國の川と違つて底が見へねへから深いと見へる此處から飛込ひべいか彼處から飛込ひべいか何處から飛込んだらつん流されべし死ぬには入らぬい廿八文此處へ上せて置けば乞食が何か拾つて往くべいから此處へ上せて置くべいと正直に橋の欄干へ遣ひ殘しの錢を載せて 多「ア、く國で信心して居た様も様や鎮守様八幡様もお精ねい私が死と國の養ひ親の家が潰れやす假令家が潰れても私が生きて居れば建て直すことが出来るが江戸で奉公するよりは肝心な受人になる人が三百里先きへ往てしまひ受人がなければ奉公は出来ずと云て國へ歸れば抜刀で難欠けられて殺されてし

まやすから據なく爰から飛込んで死やすが何卒私かぬい後の國の家が立ちますやうな守りあすつて下さいまし南無阿彌陀佛くく」と掌を合せてアハヤ身を隠らして飛込うとする後ろからこれ待なさいと多助を抱き留めました此者の善か悪か次回に申上げませう

第十回

淫慾自招吉凶凶  
 僥倖偏甘苦中樂

お話し替つて鹽原の家での今お榮と丹三郎と婚禮の毒蓋をしやうといふ所へ分家の木左衛門が参りました 太「其毒蓋を少し待つて下さいといはれて 多「どうしてお前さん來ましたと大きに驚きました 太「ハイ驚いたかも知んぬいが私ら驚いた何ふ云譯でお榮が所へ婿が來るか私も分家で居て其譯を立んぬいと云事ぬいから何ふ云譯で婿を取りやすかそれを承はり度ハイ 多「實にお知らせ申たいと思つて居りましたこれが表向きの祝儀と云ふ譯ではなし一旦極りを付けてからお話しをしやうと思つて居りましたが婿を取ると申譯の先月多助が出てから女世帯ですからどうか婿を取りたいと思つて居りますと此處においで丹三さんの御病身でも屋敷奉公の出來ないと云ふ所からお上へ願て御開濟になり名主様の



お目入れでありまして年齢もよしお榮は江戸表のらの知己でもあり丁度宜しいのらお武家様から百姓の家へ養子に来て下さるのは有難い事で誠に新様な身に取て有難い事はありませぬのら取極めました實は貴所の所へお話しがしたいと思つて居りましたが誠に急な事になりましてはんの内祝言として後で貴所の處へお話ししやうと思つてとりましたが今丁度貴所がお出でなすつて下さつたのらどうもこれへお坐りなすつて下さい 太「ハイそれや承はりたいもんだお榮には多助と云ふ亭主のあるのに何云譯で婿と取りやすへ 多助くど仰やいますか渠は親と捨て家と出るやうな奴ですのら假令歸つて来ても私の血縁だけに世間様へ對して入れられませんのらお榮に婿と取るのは當然です 太「是やア承りてい此處原の家の相續人は多介と定つて居やんといふのは去年六月晦日の晩に死んだ角右衛門殿の枕元に貴所も多助もお榮も五八も私も居たが角右衛門殿が臨終の際に何にも云ふ事はねいが己ア家の相續人は多助と定めて居る此度は我ア死病と定めて居るのら一言云はねいければならぬいと云ふものは多助にも嫁と取らなければならぬ就ちやアお榮は多助の爲めには從弟ありお繼の爲めには多助は甥なりするのらお榮と多介の縁にして此家と相續させ

れば此位安心な事なぬいと多助の未だ年がいくぬいによつて太左衛門己へ此家の後見に成て我が亡へ後を頼むと遺言をして私が媒酌に成て病人の枕元に湯盃をしゃんした其遺言にある通り多助の一軒の主人だからそりやア随分南部の盛岡の方よ馬のいゝのが出たとか又山の賣物に安いのもあれ買ひに往きてへが急ぐんで家へ知らせる間もなく直ぐ又往つて来たとか云て明日が日歸つて来るかも知んぬいうら若しも多助が歸つて来て私いも無沙汰で何んでお榮は婿を貰へやせんしたと我れに云われた時の我の一言半句でも申譯がぬいそれだから私の眼の黒いうちの何うしても此祝言のさせる事の出来ぬい 太「お前さんの何んどといふと多助くど仰やるが何故そんなら一軒の主人が親や女房を捨て出て往て仕舞ひましたサアお前さんの多助を最負にするから若し歸つて来たらお作さんの婿にでも何にでもおしなさい私のどうしても彼様な者の家へ入れませぬ 太「其事柄が極上での婿を取るから取るもいゝが極らぬい中の取らせねへ我ア分家だにハイ 太「祝言と云ても内々だけの婚禮で村へしらすした譯でも何んでもありませんのナ 太「假令内祝言でも我ア分家だから内輪だが内輪の我に知らせねへと云ふ法いあんめいと頼りに争つて居りますと土間の方



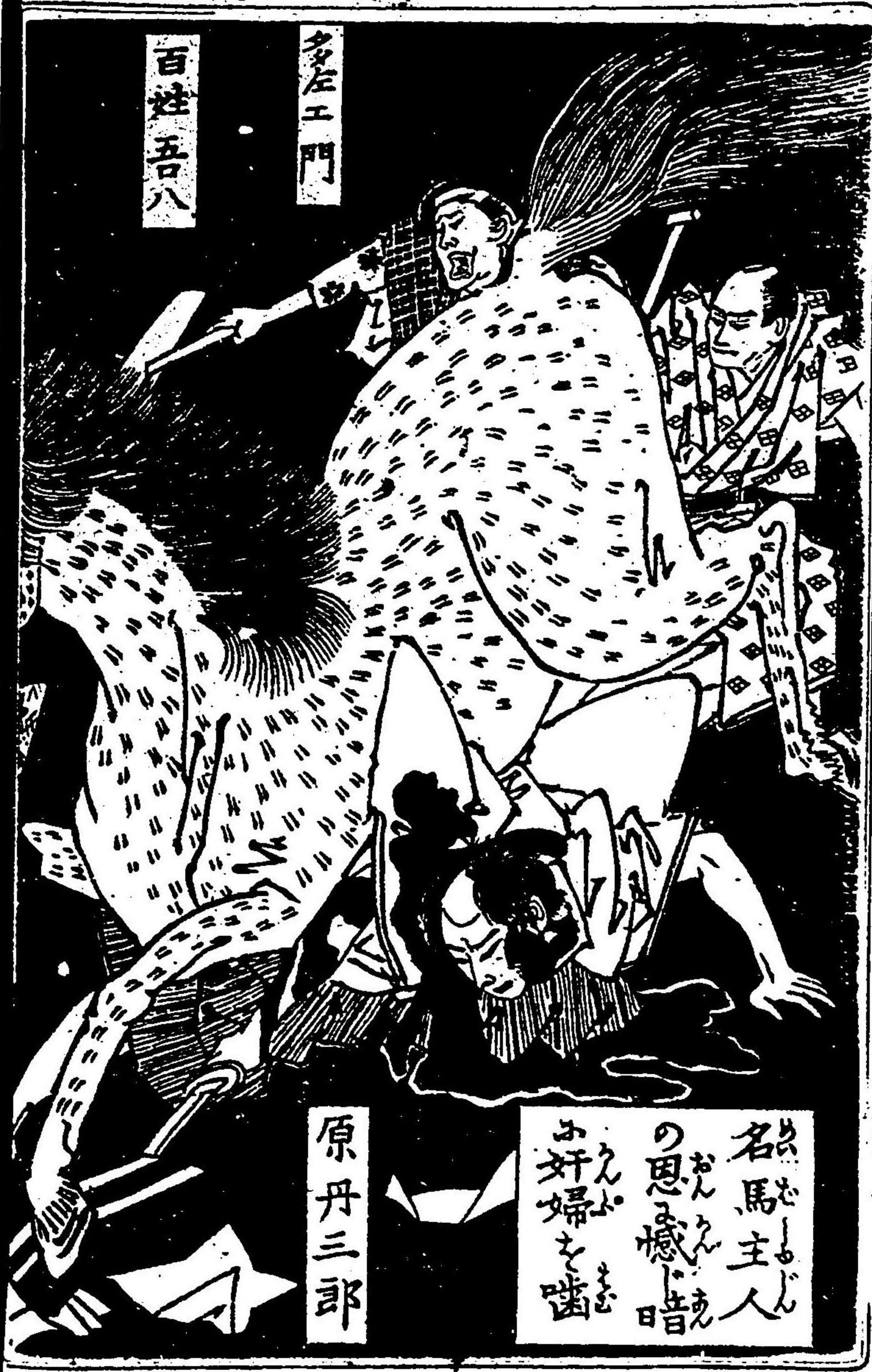
から五八が 五「旦那様確り遣つてお呉んなせい村中が付いて居やすから確りやつてお呉んなせいと怒鳴りますし太左衛門の申の實に理の當然ゆゑも龜も困つておりますと其頃の名主といふと威張たもので幸左衛門と云ふ名主様が 幸「太左衛門く 本「これやア飛んだ迷惑な所へお出でなすつて嘸お困りやがんせうが今申した通りの譯だから何うか此度の所の原さんの所の引取つてお呉んなせいやし 幸「コレ今聞いて居れば汝へ分家だと言つて此婚禮を拒む譯のあんめいと云ふ譯の此村方の誰の支配を受ける土岐様の御支配で其御家來の子息さんが此家の譯に成つて呉れるだから此上もねい仕合せ殊に外の者が媒妁をするのと違つて此名主が媒妁をするのだから禮の一言も言はさなければならぬのに何いふ譯で汝ア拒むな 本「ハイ拒みやすナ貴所名主様なら何故私しが處へ話しをしやんせん此家には私より外に親類のありやんしねい小前の者が違つたことをすれば論してやるのが名主様の役だのに其名主様とあるものが親類へ話をしねへで濟みやすかへハイ 幸「それのどうもハア至極尤もな様で成程どうも尤もだが只今も言通りこれが表向の祝言でねいから知らせねへので表向の祝言ならば親類や何かへも知らせ權那寺まで届けるんだが表向でねいから





原丹次

お茶



百姓吾八

名馬主人

原丹三郎

名馬主人  
の思懐暗  
く奸婦を  
噛



知らせぬのでハイ 太「それじゃア私の内輪の者じやねへうへハイ 幸「内輪の者には違  
へぬいがどうも只今も申す通りどうも其御領主様のどうもそのと名主も辭に支へて仕様が  
ありません何んど云ても理の當然ですから名主も返す辭が無く困つて居ると原丹治が見  
ねましたからそれへ出て太左衛門より少し座を下つて坐りまして 丹「太左衛門殿私もどん  
ど心附うなうつたお前の方にいお話しがあつた事と心得名主様も御繁多でもあり殊も小前  
といへば子の様に思つて居る所からお前の方への跡で話しをする積りであつたかも知れん  
お龜がお話しをせんと云ふのの重々悪いが渠の女の事で其邊に心附す實は申譯がないお前  
の言ふのの理の當然だが此婚禮が儀談に成てい何も知らないお榮や丹三郎が可愛さうだお  
前が承知さへして呉れば實に此上もない目出度事だらうか勘辨してやつてくれ此通り  
丹治が首を下げてお詫を致す 太「これの恐入やすマア頭をお上げなさい至極汚尤もな譯で  
かんすが又御城中のお土が百姓に手をついてお詫をする譯のねいが道に背くからお詫言を  
なさるんで道に背いた事はどうしても通せぬい貴所がなんと言ても亡つた角右衛門の前へ  
對して此婚禮の出来ねへ又何も知らないお榮や丹三郎が不便だと仰やれば些申たい事があ



るお榮や丹三郎さんが何にも知らぬいと書譯はがんにねへと言ふものは先達で店で拾た文  
がありやす私も焼て仕まふべいと思つたが取てありやすからこれを表向にすれば貴所の御  
役にも係はるから何にも云はず歸つて下せいと云はれた時は原父子は喫驚してそれでは  
先達の艶書を太左衛門か疾に焼捨てた事と心得て居たが取てあつたかア、困つたものだ  
と思つて居ると丹三郎は血氣の壯者ですから心がはやつて此奴が居るから可愛お榮と夫婦に  
なれないと思つて側にあつた一刀をズツと抜いて突然太左衛門に斬付けますと其頃は人切  
り庖丁に驚いたもので太左衛門はこれを見ると驚き外へ逃げ出さうとして椽側から轉がり  
落ちて慌て、厩の方へ逃げると五八は鑷を提げて 五「サア旦那様を殺せば汝を殺すぞ多助  
さんの代りに我が汝を打ち殺すだ」と勢ひ烈しく抗ひましたから丹三はこれに憶して後へ送  
るとお榮は嫁入姿の儘で驅出し可愛丹三さんに怪我をさせてはならないと思ひ突然に五八  
の頭髪を取て後ろへ引き倒さうとする所を前から丹三郎が五八の面部へ切り付けましたか  
ら 五「ア、我を切りやアがつたなど云ふ丹三郎が尙は切らうとする」と太左衛門は厩の方へ  
逃げて來ましたが向ふは厩西の方は灰小屋此方は生垣で路がありませんから慌てし前の方



の大豆や小豆など干してある所へ来て筵に躓いて倒れる所を丹三郎が長刀を揮上げ一刀に太左衛門を切らうとする太左衛門はとうしても通れる道はありませんが妙なもので庭に繋いである青といふ馬は多助が家を出る時沼田原の松の木へ繋いで因果を含めた所多助の云ふ言ふ感じて泣たど云ふくらの名馬でありますうら今太左衛門が丹三郎の一刀の下に殺されやうとする有様を見るとポーンと庭から躍出しました田舎では庭の前にマセと云ふ丸太があります其マセを馬が鼻先で反ね除けて外へ躍出して突然後足を揚げて丹三郎を蹴ましたうら丹三郎は其處へ倒れますと馬が丹三郎の肩へ噛付きましたから丹三郎は宛も苦しげにヒイと泣聲をあげ七顛八倒の苦しみを致しますこれを見て居たお榮は驚いてアレと云ひながら逃出しますと馬は尙更暴れてお榮を追駈けて背後うらお榮の鬣を噛て後へ引倒して花嫁の美しくう濃てりとお粉粧をした顔を馬がモリくツと噛みましたからこれに全く馬が多助の難を討たやうなもので御坐います此間太左衛門と五八の表の店へ往て来合せて居た若衆にこれくの譯だと話しをすると平常悪まれて居る名主だから名主も原も打殺してしまへと云ふので是うら百姓五六十人が得物くを持って鹽原の家を取圍むと



云ふお話しに相成ります。扱又た薩原多助は進退に谷まじり已むを得ず今や昌平橋より身を投げやうとする所を背後より抱き留められ。多「誰様かは知りませんが何卒放してお呉んさせいで居られねへ深い義理にからまる身の上何卒放して死なして下せし」コレサそれだが今聞いて居れば遠い國うら出て来て奉公をするのよ受人がねへから死んでしまふと云ふのだらう死ぬの義理ある家が建てられねいとか云つたナ。多「ハイさうでござんす」死んで家が建てられなければ死ぬのやア及ばねへじやアいか。多「それでも斯やつて居れば腹が減て死んでしまひやすからさうか放おして死おして下せし」ダガサア其受人がなくなつて奉公に置いてくれる人が出来れば宜のだらう。多「ハイ」コレこんな乞食のやうな者を奉公に置いて呉れてはござんせん。我の家で奉公に置いてやらうが斯様お断末場に成ると死ぬ氣にもなるもんだが人間と云ふものは少し熱氣が脱ると苦しい事を忘れてしまふものだらうお前が死んだ積りも成て働けば置いてやらうヨ。多「ハイお前さん何處うら出た私ア死ぬ苦みをして働く事は何んとも思ひやせん難有がござんすさう置くておくんせへヨ」ダガノウ此心ろを忘れてはいけないヨ死ぬ時は了簡の出るものだが少し過ぎれば忘れるものだからお前が死ぬ氣よ

成て辛抱さへすれば國へ歸る時は小遣位は持たしてやるから私しと一所に來なさいと連立で参ります此人は神田佐久間町河岸に居る山口善右衛門と云ふ炭問屋で家は八間間口で土蔵も幾箇あり奉公人も多く使つて居ります。善「今歸つたヨといふと奉公人が皆な出て参つてハイお歸り遊せ」奉「大層お歸りがお通からお迎も出やうと思つて居ましたコレ」夜まで乞食が入て来て困ナ。善「乞食じやないそれは私が連れて來た人だマア此方へお入り」多「ハイ御免なせい」善「コレ」お前其繩の帯だけ取なさい其處の番手桶よ水が汲であるから足を洗ひて雑巾は手桶に掛つて居るからナニ湯布がないサア出てみい、ヤナニ湯布も賣てしまつた此方へ上がんナさうか若衆此人を家の奉公人にする積りだから世話をアしてやつてくんナ國から出て來て便る所がないと云て今昌平橋から身を投げやうとする所を助けて來たのだ。奉「ハイそれは御奇特の事で御座います」多「皆な此處に居るのは番頭さんでござんすか私ア遠い山國から出て來て便る所もねへから今身を投げべいと思つた所を此方の旦那様に助けられましたものでござんすさうか目を掛けて下せし又貴所は番頭さんだから斯様な者を置ちや養めなならねいから退出してしまつた方がいゝさんで旦那に意地を



附けぬいで下せしヨ 善「そんな事を云ひないでも宜しい賀村で宜しいなアどうだ腹が減ら  
 らうナニ昨日うら食さいコレ小僧臺所へ連れて往てお飯を食して遣キヨトくしての不宜ヨ  
 今日御先代の日なり誠ニ好事をした 番「誠によ御特奇を被成升た 善「今の男のどう辛  
 抱をして義理ある家を建度と云誠に好心掛の奴だらう何う皆が目を掛て遣て呉れ物に成そ  
 うだコレく飯を喫て来たう 多「食い過ぎて坐われねへ萬一追出された時三百里往けねい  
 と困るから 善「何よう食べたか 小「何も喫べません何をやつてももつたいないくど云て  
 何も喫べません鹽物をやつたがそれも喫べせんお香物を嘗つて御膳を喫べて一番仕舞  
 香物をガクくど食べました 善「そうか妙な男だアオイく善太郎此處へ来なこれの今  
 私助けて来た人だ何と云つたつけなア助けて来たから多助う多助やこれの家の侍だらう  
 又いろく用を云付けるから 多「へい若旦那様でがんすうハア今夜の貴所の父様も助けら  
 れやしたどうか御目をうけておくんなんしよ貴所の着て居るのの和けへ着物でがんす 善「  
 家の侍の和けへ着物でなければ着ないのさアにこれの不斷着で結城紬だ 多「へいこれが  
 結城紬でがんすう結城紬と云ふもの糸を一々手で拵て夫れを高機でうるく打付けて置く



のでいねへ女供が力まかせよキイツと締め織んだから容易に出来るもんじやアねへそれ  
らを不斷着るのいもつていねへじやがんせんうこれうら貴所と兩人で一生懸命は成て穢  
へで此家を大きくしねへならねへ貴所も親孝行をして此家を大切に思ふたら不斷の木綿を  
着るがようがんすヨ而して旦那さんあれじやア奉公人のお茶が多うがんすヨ何でも奉公人  
のお茶の二度のいらねへうら一度なせいまし杯と一々主人の前で申ますから主人の妙な  
言を云ふ奴だと思つて居ります多助の善右衛門を命の親と心得有り難く思ひ寝ても寤めて  
も恩義の程を忘れず萬事に氣と利かして骨身を惜まらず一生懸命にくわくと働きた子は伏し  
寅も起るの誠めの通り子と云へば前の九ツて寅の七ツ時で湯座いますから寢る間も何にも  
有りいしません朝の未明うらうら起きて先づ店の前を竹箒で掃き犬の糞などがあつても穢  
いとも思はず取除けて川へ投げ捨て掃除をしてしまふと蚤所のお三さんが起きて釜の下を  
覗き附けると多助の水瓶へ水を汲み込んで遣り其うち店の者が漸く起きて臺所へ顔を洗ひ  
に来ると一々手水盥へ水を汲んで遣り店の土間を掃いて居る中に店の者が湯飯を喰べてし  
まふのち自分が食事を致しそれから直ぐ納屋へ往て炭を擔いて奥藏の脇の納屋に積み込む



何やかや少しの隙もなく働きまませゆゑ主人は素より店の者まで皆な感心致して居ります多助は餘程希体な着物を着て働らいて居りますゆゑ善右衛門が「多助や〜」多「ハイ〜」  
 「お前と皆な襦袢の垂つたものを着て居てはいかないヨ勇次郎の着物の古いのを遣てあるの何故着ないのう」多「ハイ難有がんすけれどもどうも着ればハア破れやんすから矢張り此古襦袢の方が惜氣がさくつて却て働きやうがんす」善「働さ宜いもつて餘り見ともない夫れは蹴足で歩行くの廢セヨ草履を穿きな若し踏抜きでもして三日も四日も休むやうではいかんヨ」多「踏抜きはしやせん踏抜きをしねへやうも朝未明うちに貝売や小い砂利だの瀬戸物の碎片があると掘取て置き清潔に掃きやんすから平垣に成て居りやす」善「それでも餘り見つともない蹴足で納屋から往たり來たりするから人様が見て山口屋の奉公人は何んだあんまり形をさせて置く乞食を見た様な形だと云はれては外聞が悪いはナ」多「且那樣そんじやア人が聞いたら渠も奉公人じやない乞食が御百度を踏てるのだぞ云ひなせ」善「ろんな言が云へるものか何か着物はぬいかへ」多「且那樣此間柳原を通ると大い古着屋の家よ一枚買ひてへと思つた着物が有りやまたから價聞いたら六百だと云ひやんしたのが五百五十

文位には負けべいと思ひがすがねへ買てもようがんすか」善「山谷漢だと思つて馬鹿にして胸物でも買られてはいかないせ」多「ナニ私い悉皆檢めやんまた事に依たら紐目を縫ひて裏返えて見べいか」善「それが氣に入て着らるなら買て來るが宜いと錢を持たして遣りませ」多「多介は急いで柳原へ參り彼の古着を買取て直に着て歸て參りましたを善右衛門が見て善「ア、妙な撫梅だのう和平どん見ささい紋付の筒袖は始めてだれう妙なものだナ」和「〜異風ですなアハ、ハ、ア私も紋付の筒袖は始めて見ました」善「撫に撫て善の紋付を買て來たのは何いふ譯だ薩摩様の御紋所れやうだナア多介何かそれがお前の家の定紋か」多「ろうじやア有りやせん且那樣聞いておくんなせい國を出る時に沼田の原中の一本松へ長い間引慣れた青と云ふ馬を繋いで名残が惜いから暇乞をしながら馬は前向を撫て我へ江戸へ行き奉公して歸て來るまで達者で居て呉んろと私い泣きやんして其馬を撫でたり驅たりまやすと馬も別を惜んで泣きやんした私も馬の泣たのを初めて見やんしたが大い眼から涙を砂原にバラ〜と落しやんした時には私い人に別れるより辛くはて書生でまへに斯やはて名残を惜んで泣くかと思ひやんした時には實に辛くつて私い袖びつしよりにしやしたが



夫ら江戸へ出て尋る人には逢へず外に知る人も無つて商人になりてもないから奉公する事も出来ねへで一層身い投げべいとする所を旦那様に助けらる今では雨にも風にも當らねへて助けへお飯を喰ちや斯やつて何に不足なく居りやんすが人は樂になると直に難儀した事を忘れるもんですから私其難儀を忘れねへ爲めに見當つた此誓の紋で少し我儘な根性が起した時には此紋を見て馬お別れた時の辛い事を思ひ出してそれを思へばなんでもねへとお手本おなりやんすから買て來やした 善「ハイ」成程「感心どうも感心和平どん特別だのう 和「誠」に感心な事ですなア妙に異つて居ります日 善「マア」精出して働け 多「へい」難有がんとす隙間なく身を粉に碎き忠義に働きますゆゑ出入りし者も自然多助を可愛がるものばかりで御座います斯くて其年も果て翌年の丁度九月頃も多助も大きお用向きに慣れて参りましたゆゑ 善「多助や」多「ハイ」善「お前のう未だ給金を極めなかつたが能く働いて呉れるから給金を極やうのう 多「ハイ」旦那様私給金は戴きましねへ 戴かんでこのんから給金だけは極め呉れなければ困る日 多「うそれだけどうしてもしきましねへ 善」極めた給金茂善えて國へ歸る時の資本にして國の家を建てるのじやアない

多「デモ命を助けて呉れた旦那様の爲めは働くの當然だにお給金を戴いての済みましねへ 善」それじや困るのう 多「そんなら旦那様私一ツお願ひが有りやすだ其處等に落てる廢物を拾ひ貯めてそれを賣り二文でも三文でも旦那様へ預けるから安い利で宜いが私國へ歸るまで預つてお貰ひ申してい 善「拾ひ貯めると云て何を拾ふのだ 多「何てへ事なし廢になるもの烟草の粉でも草履草鞋の不用つて昔ながら棄るもの繩切れでも紙屑でも何でもハア貯て置て賣りやんす 善「そんな物を買人が有るか 多「何でもハア廢りにいなんねへものて釘うけでも拾ひやんすそれを賣て金を蓄めやんす 和「餘り拾いたがつて若し店へ來たお客が落した烟管や烟草入などを拾ていけねへせ 多「そんな事いしやしません何でもハア人の不用なつて棄る物べい拾ふので番頭さんそんな根性が些とべい有りやんすねへ根性が無くちやそんな事い云はないもんだ自分の心よ有ると人もさううと思ふものだが私の皆が不用なつて川へ打投る物べい拾ひ集めて蓄めるんでがんす 善「何處へ蓄めて置くのだ 多「裏後の屋根が破れて物ぐはいらずにあるうら板を載せて置きやしたぐ裏の大きな納屋が明いて居りやんして別な物を納れさい様でがんすが旦那様彼處を安い店賃で



お貸なすつて下せぬまし 善「お前に貸すのに店賃も何もいらん 多「そんなら恥度彼の納屋  
 へ物を一杯詰めても大丈夫でがんすう其代りお給金なしで働さやす 善「感心な事だ其志  
 が面白い貸して遣りますすが些と方々の御得意や御屋敷を敷へて置らなければいけんが戸田  
 様のお邸へ多介を遣らうかノッ番頭 番「それ宜しう御座います 善「多助や 多「へい 善「其  
 處に四俵大俵が有るだらうそれを向ふの戸田能登守様のお屋敷へ持て往て呉んか御通用門  
 から入つて鎌田市作様のお宅へ届けるのだ知れなければ御門で閉さなど請取書を持たせて  
 遣りました多助の路草を喰ひすギシシ〜擔いで参り戸田様の御門に懸りまして 多「ヒエ御  
 死なせい 門番「なんだ〜 多「炭屋善右衛門の所から参りやしたが此お屋敷の御家來に鎌  
 の一昨日と云ふ人がありやすか 門「なんだフ、鎌田市作様 多「そんな能知てる 門「何  
 だけしからん奴だそれの御門に入つて板扉に附いて眞直に行くとお馬場の所に出るから夫  
 へ附いて曲ると裏手よ四軒お長家があるが二軒目のお宅だ 多「難有がんすと又ヤシ〜と  
 擔いで敷へられた通り参りますと鎌田市作と云ふ權札がありましたゆゑ 多「御免なさい 善「  
 なんなのう 多「炭屋善右衛門から炭を持て参りやした 士「そうか大きに御苦勞幾俵持て來

たへ 多「四俵持て参りやした 士「そんなら二俵の此處に置いて跡の二俵の一軒隔てお隣のお  
 宅まで持て往ておくれ未だお荷物も片附くまいが手前方から左様申したと二俵持て往てく  
 れ 多「ハイ一軒隔てお隣りねようがんすが代を貰ひていもんでがんす 士「跡でやるヨ 多「  
 でもアア斯やつて請取に成て居りやんすからそんなら二俵だけ載いて置させう 士「跡で  
 一處に遣るヨ 多「それでも炭取てしめへに代をよこさねへで跡で炭取た覺のねへと云われ  
 ても私の田舎漢で仕様がねへ主人が大事だから代をよこさねいじやア困るマアよこせ 士「  
 よこせどの何だ訝しな奴だそんなら持て往て代を投げ出すを多助の受取り懐中へ入れそ  
 んなら此二俵一軒隔てお隣へ持て往させますべいと其所へ擔いで参り 多「御免なせい〜  
 善「どうれ誰だ 多「へい私の炭屋の奉公人でがんすがアノ一軒隔てお隣の鎌田市作様の處  
 から炭二俵持て來やした 善「炭屋の男か大きに御苦勞だのう 多「我ら家の炭の宜い代物べ  
 い選んで安く賣りやんすから炭を買ふなら得だから我らア方でべいお買ひなんしよ他で買  
 てる駄目でがんすヨ 善「のイヨ他で取らないヨ此處へ置いての邪魔よなるから開きが明い  
 て居るから其處へ入れてお呉れ 多「そんなら此片袋の下へ入れて置きやす犬が小便をうけ



ると焚いて臭いから戸を建掛けて置きやんと云ひながら縁側の方を見ますと旅荷物に纏り附けて御座います荷札に鹽原角右衛門と筆大に書てありますゆゑ多助は氣が注ぎこして思はずツツ縁側の方へ参りました

第十一回

嚴父遮ニ慈母一屬ニ孝子一  
奸天伴ニ淫婦一會ニ毒尼一

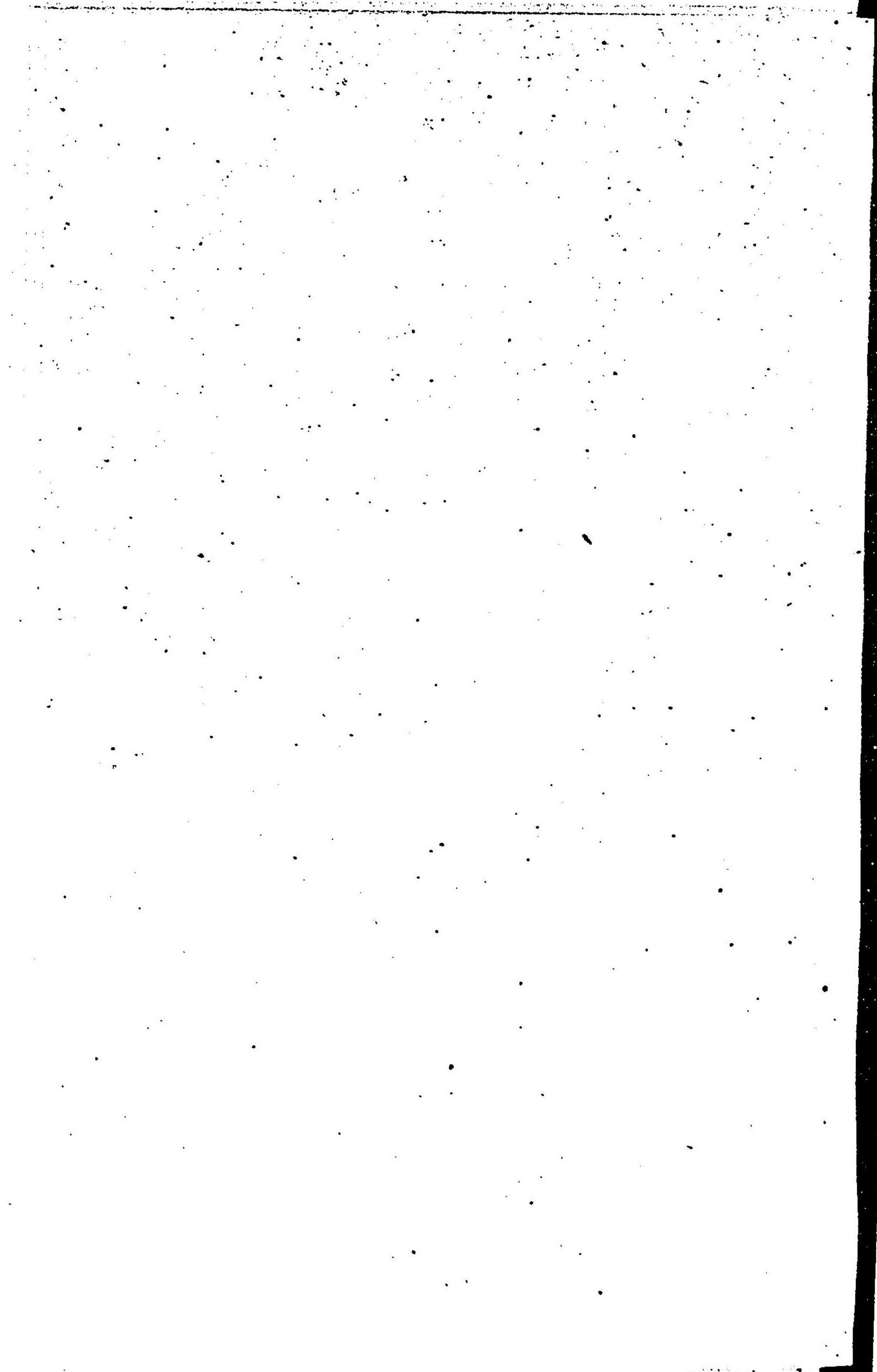
多助は戸田様のね屋敷へ炭を持って参り歸らうとして不圖目に付た荷札に實父の姓名があるに思わず縁の方へ扉より「今出たお神さん」妻「可笑い男だヨれ神さん」と云て何だ目と云ひながら庭口の縁側の障子を明けて出て來ましたのは年頃四十五六の人物の宜い御新造で不斷看ゆる袖位ではありますすが御屋敷は堅いもので紋付を着て居ます「何にか用があるのかへ」多「此處に荷物が有りやんして木札に鹽原角右衛門と書てあるか此方は肥前の嶋原へた國詰に成て往た方では御座りませんか」妻「能く知て居るのう當家が鹽原と云ふ日多「それでは此處な家はあの元と阿部様の御來家で有たが久敷浪人して上州小川村に居て又此處なれ屋敷の御家來に成た方で貴婦は鹽原角右衛門様の御内室のたせいさんと云ひや

んすか 妻「アヤ其通りだがどうして知てお出たと云はれ多助ハ飛立つばかりに嬉しく思ひ泣聲を振り立て 多「お母さまと云ひながら我を忘れておせいの裳にピッタリと纏つて 多「お慈しふのんしたれ母さま八歳の時に別れ申た貴婦の實の子の多介でがんすヨ 清「オヤマアどうもマア思ひ掛けないコレ多介見る影もないろんな姿になつてと云ひながら同じく泣き出しました 多「是には種々深い譯かかんしたの事でどうかお父様やれ母様に目に掛りていと心掛けて居りやんして信心をしたお蔭でマアお達者な御顔を見られやんしたと云ふ聲を聞き附け奥より角右衛門が出て参り物をも云ひす御新造の手を取て奥へ引入れ縁側の障子をバツタリと建切て仕舞ましたから多助は呆然として 多「お母様——今此處へ出てお母さんの手を持って引張り込れた人は誰だへれ母様若しやお父様では御座りやせんかへお母様——お父様か—— 角「黙れ荷にも殿様の御側近く勤をする鹽原角右衛門炭屋の下男に知己は持んわい成程今を距る事十五ヶ年以前阿部家を出て上州東口の 小川村に八ヶ年程浪人して居た其折沼田の下新田に鹽原角右衛門と申する百姓が居り私と同じ名前の好みを以て乳のない所から粹の多助を育て、呉れろと頼まれたゆゑ餘儀なく引受け之れな



る清の乳を哺まして八歳までの養育したが最う八歳にもなつたら歸して呉れろとの頼みに依り早速親許へ引渡した時に其方の實父角右衛門より長らく侍々御厄介にあり禮の仕方がないからと云つて聯かでの有るがど五拾金を禮として呉れたればこそ拙者の其五拾金を持て身支度を整へ借財を拂つて江戸表へ出て参り御當家へ御抱へになり只今での御側近を勤め三百石頂戴致して居るも沼田下の新田角右衛門殿の恩義でないか拙者も其恩義を知らんていないが御當家へ御抱へにゐると間もなくお國詰を依付けられ萬里の波濤を隔て居れば都度〱書面も送らんが又愁じいに便りを致せば其多助と云ふものが八錢まで育てられた事ゆゑ却て此方を實の親と心得違ひを致し實父角右衛門殿は不幸な事でも有はせぬと存じて態ど心あつて便りを致さず居た併し十四ヶ年振りで江戸表へ出て参り餘り懐しいうら先達で國へ書面を送りし所角右衛門殿の分家太左衛門より返事が参り披て見ど角右衛門様〱昨年没し跡目相續を致す多介と申すもの〱昨年家出を致し跡方の焼失して惣原角右衛門の家〱絶たど云ふ返事に大に驚き其返事の如くなれば多介と申す奴の人でよしと只今も申し居る所であるが若や其多助と申す者の〱八歳まで養育されたゆゑ我を實の親











と心得て江戸表へ参りスウ〜しく來るとも對面は國の角右衛門殿の位牌へ對しても相成  
うと心得るかソリヤア若いうちの事ゆゑ女に騙れると或は酒食に其身を果し路頭に迷  
ひ見る影もない姿となり迂路〜致して居らうかと朝夕共に此清と心配致して居たがど  
うも何共云ひ様なき不孝不義の奴家督人たる者が親の家を捨て、國を立去るとは重々の不  
届奴め假令此處へ参ればとて面會致す様な角右衛門と心得居るかへ目通りはならんから早  
々出て往け 清一誠に御立腹の段は重々御尤もさまで御座います多助に前心得違ひをした  
らう若い内には随分有りうちの事とは申しながら前より外に鹽原の家を續く可きものは  
ない其大事な家を捨て若氣の至りとは云ひながら女に溺れて金子を遣ひ果し家に居られな  
く成て家出をしたのだらうが何んとマア淺ましい心にたなりた今から十五年跡に前を沼  
田の下新三へ遣てからと云ふものは暑いに附け寒いにつけ旦那様も私も前前の事を忘れた  
事バありませんヨ痘瘡はしたなれど知らぬ田舎へ行て我儘を云て叱られやしないか又田舎  
の事だから手習や學問も碌々出来まいだらうしどうして居るかど毎日お前の噂ばかりして  
居ましたがろん姿で來たとて親父様は中々物堅い御氣性だからお通ひに成る氣遣ひはな



いから辛抱をして國へ歸り立派な據原の家を相續して出て來るは其時は御逢ひになるかも知れないが只今の身の上で逢ふと云ふれば無理な話しうんな見苦い姿で迂路／＼して炭などを擔いでお父様お母さまと云われた譯ではあるまい田舎育ちとは云へ餘り分別がないでこないか又お謝ひの出来る時節もあらうから早く往きおさい 多「ハイ」私の中々女杯に翻れて金を遣つて國を出た譯ではがんせん私いだつて國を出たくはねいが居れば命に係る事が有て實はど國の事を云ひ掛けままたが思ひ直してイヤ／＼養母やお榮の事を迂路に御兩親の御耳に入れたならお龜とお母様には實の妹又女房お榮は實の姪此母子の悪事を聞かれたら物堅お父親様やお母さまが驚お驚き遊ばし御心配なさるだらう云わすお居ても跡で事の分る時もあらうから惣か御心配を掛けるより寧ろ何にも云わすに歸へらうと佛の様な心な多助は何にも云ふまいと思ひまして 多「御尤もでがんすが種々深い譯が有るとでがんすて御聞かせ申ていが云ふに云これねい譯が有て云ひやんせんが跡で事は分りやせう私い國に出ねへば命に係る事が在て據なく出たゞ出れば跡で家の潰れる事は知て居るが命を取られては家を立てる事も出来ねへから私が江戸へ出て奉公して金を貯め國へ歸つて家を興さ

うと思つて江戸へ來る事は來たが便るものががんしねへで去年の八月廿日此お屋敷へ尋ねて來てお父様やお母様はお達者で居るかど御門で開て見れば御國詰りに成たどの事でお國は宇都宮だつたのが御國替に成て肥前の島原で三百里も前だと云はれ頼みの綱も切れ果て入路頭に迷ふ身の上となり仕方がねへから昌平橋から身を投げべいとすする所を助けて呉れた之今の主人山口屋善右衛門様深切に世話をして請人なしで奉公人に使つて呉をやらしたから私い山口屋で十年でも二十年でも死んだ氣おなつて株金を持へ國へ歸て據原の家を建てて居る心でがんすからどうぞ心配なすつておくんなさるお 角「黙れられ程まで恩義を知て居るものが國の家を捨てし出るかへ恩義を弁へて居るなれば町人でも士でも同じ事だから今の主人善右衛門と申す者の命を助けて呉れた恩人殊に主人であるから身を捨て奉公を志忠義に勤先わけ手前が金子を持へ國へ歸り一旦絶へた親の家を相續し親より勝て立派な家建ててろヨ身を立て道を行なひ名を後世に揚げて父母を顯はせくらいのことは八歳のとき孫物語に度々申聞けてあるではなわの手前も武士の粹イヤナニ假令百姓の子でも其位の事は辨へて居るだらう早く歸れ 清「逆も御逢ひはあいられ縁と日 多「ハイ歸りませう八



歳の時にお別れ申ましたから親父様やお母様のお顔を確知んなかつたがお母様には今始  
 めてお目に掛りましたからお母様の顔は斯ふ云ふ顔で斯ふ云ふ姿だと云ふ事は覺へやし  
 たが親父様のお顔は知りやしねへからお顔だけ見せておくんない左様すれば親父様が表  
 をお通しなさる時お顔を眺めてア、お達者で戸田様に奉公していらッしやるかと思へば假  
 令言葉は交せねへでも心丈夫に奉公が出来やんすからどうぞお顔を見せておくんないヤ  
 ア親父様ナニ殿様どうぞお願ひでがんすからお母様ナニ御新造様どうぞ旦那様へ取次でお  
 顔を見せておくんないせへヨウ御新造様と我れを忘れて縁側に這ひ上て男泣く泣倒れるを障  
 子の内で聞く塩原角右衛門も堪へ兼ねる親子の情合思はず膝へハッくと涙を落しました  
 流石に武家魂は違たもの屹と思を返して聲を荒らげ「黙を早く往かぬか何時までも兎や  
 斯ふ無禮の言を申すか荷先にも殿様は御側近くを勤むる身の上で炭屋は下男に知己は持た  
 ん運々して居ると障子越しに鎗玉に揚るぞ」多「へいへい」参りやす突殺されては仕様かねへア  
 、難有親心だなア自分だつて逢ひたくもめんべいけれども義理堅い御人だから一旦人小異  
 れたもんたら己ア子じやねへと云て向ふの子と思はせへいとすのだ己だつて實の子だ

か鹿の子だか知てるが堅いから鎗で突殺すと云ひやんしたから是から鎗で突殺された氣に  
 成り死身に成て奉公しやんすからどうぞ心配しねへで下せいハサ段々お寒くなりやんすか  
 らお体を大事にしてくだせい私立派なるまでお達者で居おくんないヨ左様ならとオ  
 イ〜泣ながら御門へ遣て来ると御門が殿から 門番「コレ〜炭屋の男 多「へい」門「だう  
 した泣顔して御門切手を戴いて来たか 多「何もねへ門「コレ〜と云ふ間は無間表へ出て  
 漸く家へ歸て来る 主「ハイ大きに汚苦勞だつた戸田様は七万八千石だけ有てお立派だろ  
 う」多「アノ屋敷は私生涯往くのは厭やでがんす戸田様だけは駄目だ鎗で突殺すと云はれやん  
 した 主「それは大方嘲弄たのだから 多「嘲弄れたものではありやしねへ眞實でがんすがねへ  
 其鎗で突殺すと云ふ心根が有難るんでがんすねへ旦那様鎗で脇腹を刺される心持は一通り  
 では有やすめへが始終鎗で突れて居る氣で働けばどんな苦しい奉公でも出来やうかと思ひ  
 やすから旦那様始終私が脇腹を鎗で突てると思てコキ使て下せい 主「何の事だか分らない  
 ヨ 多「誠と感心だと多助は實父の志の深さを有難心得ましたからこれより多介は命掛けで  
 山口屋へ奉公してをります申よ一つの經濟を考へ出して金を貯める工夫をするお話は此次



に申上す

扱ては話は二つに別れまして沼田の鹽原の家では其騒動は一方ならず馬が荒れ出して丹三郎を噛み殺しました時には名主幸右衛門原丹治もお龜も途方にくれて周章まはりまして是れは何も馬が多介の饗を取たと云ふ譯では座いません馬は鼻の先へ閃めく刃の光りに驚いて躍ね出しお榮を引介し丹三郎を噛み殺す様な譯なるも天の悪しみて自然は馬が斯様な事を致す様な事に成ましたものでは座います丹治は我が可愛い仲を噛み殺されたから憤怒て庭へ飛び下り馬の脇腹へ刀を突込んでこじりましたゆゑ流石に猛り大馬も其場へパツダリと横仆しになる上へ乗しかかり力に任せてギューと無闇に刮りましたから馬は其儘悲しい聲をあげて息は絶ました其中にワイ〜と人聲が致しますゆゑ丹治も觀念いたして丹治お龜も進む此家に足を留めて居る譯にいかん殊に證據の證書を太左衛門が持て逃げ出したから必ず役所へ訴へ出るに違ひないさうする時は逆も斯うしては居れないから我も身を匿さなければならぬ 龜「そんなら旦那お邪魔でせうが私もは一處に連れて往つ

て下さいまし 丹「兎も角も早く逃げる支度をしろと云ひましたが差當り二人の死骸を遺り場がありません所から右の死骸を藪小屋へ突込みましてそれうら有合した着替への衣類に百五六十兩の金を引き出して逃げる支度をして居る中に門前には百姓が一杯黒山の様に群り寄り大聲を揚げて口々に名主も原父子も此處へ出る打殺して仕舞〜と罵り立られ丹治お龜は表へ出る譯にいうない所うら一計を案じ彼の藪小屋へ火を放しましたが藪の事ゆゑ忽ち焼へ移り屋根裏へ抜けてのり母屋へ移り焰々どばかりに燃へ出した時には火事なれぬお百姓衆の事ゆる大に驚きまして丹治の逃げるを追ひ掛ける了簡もなく火を消す方へのみく〜りワイ〜騒いで居うちに丹治お龜の二人の生垣を破り逃げ出しました名主も逃げ場を失ひ漸くの事で生垣を破つて逃出さうとすると平常小前の者も憎まれて居りますから百姓衆の手に〜鋤鉞を執り名主を殺せ〜と云のでどう〜無茶苦茶も殺して仕舞ました此事早く御領主様へ聞きましたから太左衛門罷出で立派な申開きが相立ち原丹治父子の悪業お龜の不屈の次第が分りましたが鹽原の家の焼失致し夫れなりも濟みまして太左衛門の鹽原角右衛門の位牌を引取り線香の煙の通へん様も致しました此方にお龜丹治はお榮



と丹三郎の死骸を骸屋に匿し火葬に致しましたが茅屋ゆゑ忽ち燃へ廣がり母屋へ移つり  
残らず類焼する此間切れに丹治のお龜の手を取て須川へ出でそれより大戸村へ出でそれよ  
り岩本村へ掛り此平へ出るこれの上州吾妻郡の四萬の山口と申す所へ抜けて参る間道で  
獵人の袖でなければ通らん道で御座いますすが兩人の身の上が怖いら山中を怖いとも思も  
いし足弱を連れて漸くの事で山口へ参りました彼の邊へいらつじやつた方の御案内で御座  
いますすが温泉場で大久保先生が分折遊ばされた所が上州第一等の温泉であると云ふ事で今  
二人の田村と申す家へ宿を取り身隠れをして居る内は九月の末からチラ、と雪が降出し  
ました此邊の翌年の三月のあたりであくての雪が解けず其間の往來が出来ませんくら幸ひ  
の匿れ場所として居る内に因果とお龜が懐妊致しました三十九歳に成て子を設けると云ふ  
の物の因果で原丹治も困たがマア、金を澤山盗んで来たうら充分替澤をして田村の家へ  
厄介に成て居りますと翌年九月廿九日に産み落しました男の子で名を四萬太郎と附けま  
したがお龜の産後の肥立が悪く漸々の事で十一月になりますると先づ体も治まりましたか  
ら斯んな山の中へ何時までも居られる譯のものではないそれにお尋ねの風聞も大抵抜けた





赤塚おろく



原丹治

丹治毒婦  
の手中の  
陪つ

花  
亀



様子だのら古郷忘し難きの體で二人一處江戸へ往きせん暮しでもしやうじやないの候に  
金も有る事だのらとこれから二人連立て十一月の五日に其處と出立しましたが此日は少々  
空模様が悪いのと抜け出し中の條より村上村に出で男子山の麓と通り男子村と申そ恐しい  
六里餘の道と越し横堀と云ふ處へ登つて來ると雪がチラリ／＼降り出ました南の方には赤  
城山が一面に見へ後は男子山小持山北にあたつて草津のら四萬の峯山吾妻山のら一面に松  
名山へ續いて見へる山又山の難所で下は削りなせる谷にして吾妻川の流も冬の中比も氷  
は溜れて居りまそが名に負ふ急流岩に當て打落と水音高くゴウ／＼と物凄と有様で御座ま  
そ 丹「困つた物が降出して來たなわ 申し且那いけませんねへこれのら北牧まで何程有  
ますのへ 丹「己も初めて幾里あるの知らん誠に困まるな幸ひに此處に草履わらんじと用  
して有る家があるから腰と掛け桐油と羽織て往うろれより外に仕方がないアイ御免ヨか婆  
さん茶と一杯お呉れ 婆「ヒへーおのけなさんしよ誠に可厭物が降り出しやした 丹「これの  
ら北牧まで幾許あるのう 婆「ハイ一里些んべいも有りやんしよこれのらは下りにはなりや  
んすが道が難でねへア此處へお掛けなせいで困まりで御座りやせう 丹「誠に困るヨ一



里餘では今から往られたのう何處の此邊に宿屋はあるまへう、  
 二軒有たが眞實の宿屋でいがんせんら北牧の宿屋から喧ましく云はれて廢めて仕舞て今  
 はありやしねへどうも北牧までの間には有へやしるへお困りでがんせうねへ、  
 近處で泊めて貰う譯には往くまい、  
 のがあるのなんのと殿しくつて只の家へ旅人と泊る事がならねいと云ふお觸に成つて居り  
 有りやそが其寮へ往てお泊んあんしよ婆さまが一人居て困る人は皆其處へ往て泊りやんす  
 日「其寮は何處だへ寮とは何んだねへ、  
 でお地藏様の堂守に比丘尼の婆さまが一人居やそ、  
 旅人ばかりじゃがんせぬ商人乗も泊りやすそさうでがんそのら泊ませう、  
 と此處に置くヨそんなら跡へ歸て横へ半町ばかり入るのだのう大さにお世話で有たと此家  
 と立出て跡へ少々戻り半町ばかり細道へ入つて往くと破れ堂が有り其中に鼻の打缺けた  
 の處として居る石の六地藏が建てありまそ其左り手に家根のない門形の處とはいつて見ま

まど破れ屋が有ましたから臺所口から入り、  
 丹「御免下さいませ、  
 ます、  
 丹「手前は旅の者で御座いますか夫婦で乳兒抱へ此雪も逢ひ泊る處がなく困りまし  
 た處此家へ来てお願い申せを泊てくださると近邊の者に教へられて参りましたがどうかお  
 情けに御泊くださいませ、  
 比丘「嗚々アね困りで御座いませうお泊りなさいだが私も年を取  
 て居まして人様のお世話も出来ませんし又あんち庵室の事で御座いますから食物も着て寐  
 るものもござんしねへし其身其儘で轉りど御休みなさるのでよければ其處も清水を筒で引  
 た井戸がありますから足を洗つて此處へお上りなさい鹽は臺所おありますヨ、  
 御座いますとこれから足を洗つて上へ通ると四尺お三尺の居爐に眞黒な自在を掛け煤ぶつ  
 た藥籠がつるしてあります、  
 丹「實にわるいものが降り出しました、  
 時々山から雪が吹出し雪よなるかと思ふと又晴れ晴れるかと思ふと又降ると云ふので山の  
 事の頼ど分りませんヨお前さん方は江戸乃お方の様は思はれませねへ、  
 丹「左様で御座いま  
 す少々仔細が有て田舎へ参り此般歸り掛けで御座います、  
 比丘「寒心から遠慮なしお東菜を  
 くべて御煖りなさい何ふも珍馳走のから、  
 丹「難有御座いますと東菜をくべて吹さませ



ると火が移り燃へ上る焚火の光で比丘尼婆の顔を見ると年頃五十六でいゝあるが未だデッ  
 プリ肥つたみづ／＼しい婆さんで無地の天青色の布子に腰衣を着けて居りますのをお龜が  
 さつと見て大に驚きましたは三年跡沼田の下新田へ道連れの小平と云ふ草賊を連れ強談に  
 来たお角婆で有ますから喫驚致し 龜「お前はお角婆さんじやなひかと云はれお角も驚ろさ  
 角「これは誠にマア思ひ掛けない處でお目に掛りました尊婦は下新田の角右衛門様の内  
 室の御龜さんで御座いましたか 龜「お龜さんもないもんだ且那此婆さんがお藥を略取した  
 又旅のお角と云ふ悪婆で御座いますヨほんとはに比丘尼に成て斯様な處に匿れて居るとは  
 些とも知らなかつたと云を聞き丹治は眼に角立て、 丹「不屈な奴めと云ひながらツカ／＼  
 くと詰め寄て長刃へ手を掛けましたが此後は如何相成りませう

第十二回

以て毒制毒造化之奇計  
 拾利謀利經濟之妙法

扱て丹治お龜は横堀村の庵室で圖らすお覺婆に逢ひましたから丹治は刀を引き付け詰め寄  
 りますと其權藤に流石の婆も悪黨ながら比丘尼に成て居ます事ゆゑ逃げめせず先非を悔て

恐れ入り手を付きまして 丹「お腹の立ちますは重々御尤もで御座いますすがどうぞ私の申す  
 事を一通り御聞きください私も宜い年をして何時までも止ます親子連れで旅を練る悪事  
 の數も仕抜きましたが段々と思ひ返して見ると我身ながら恐しく思ふ處へ悴小平はお龜を  
 敷き送られました此の七月牢死致しましたからハア之も悪い事をした罰と實に心から洗た  
 様に改心致し今まで作た悪事の罪滅しの爲め頭を剃りまして毎日托鉢をして歩行て此村へ  
 参り慈悲ある人のれ世話て此地藏堂へ入り堂守を致し妻や引割を敷いて漸々此處に斯うや  
 つて居り毎晩／＼地獄様に向ひ若い時分の懺悔を致しお詫事をして居ます此處て又お前  
 さん方にこれ目に掛るのも皆な悪事の報ひ實に恐しい事て御座います南無阿彌陀佛／＼  
 どうぞ此圓顧に免じ勘忍してくださいませと掌を合せ拜ゆゑ丹治も一旦は長刀を引付たが  
 又思ひ返し 丹「何か貴様は全く改心して尼に成たのか 龜「マアどうもマア彼の小平と云ふ  
 悪徒は牢死しましたかへうれからお前も改心し様とは思へないが眞實に改心したのかへ疊  
 誠に面目次第も御座いませんが虚に頭が割られませうかシテ貴所方はこれかち何所へ御出  
 て御座いますか江戸へいらつしやいますなら本街道の中山道口へ出てはいけませんヨこれ尋



ねの人相書が廻つて居ますヨ 丹「エ、人相書が廻つて居るとへそれは喜んで 角「何んたう貴所のお心に聞いて御覽なさいナ私は妻しい譯は知りませんが人相書の次第を聞いて見るに沼田の下新田の後妻のお龜さんが御領主土岐様の御家來原丹治と云ふ人と奸通をし家へ火を放つて逃げたとか云ふのでお手先の人相書が廻つて居ますから中山道へは出られません雪でも解ける間二月頃まで此處に匿れていらつしやれば些どの位とほりも冷めませう今往くの危いもので汚坐いますと云われて丹治のお龜と顔を見合せ 丹「實に火を放ける譯けてはなかつたがお龜も亭主の有る身の上ではなし私も冥身者ゆゑ遂和を志した所百姓共が大勢寄つてたかつて叩き殺すと細鐵を持って取巻れ逃げ處がぬいゆゑ實は堪なく火を掛けて逃げたが人相書が廻つて居ようとの知らさかつた婆々多分の禮も出來んが兩人居るだけの手當をした上に少々位のお前も心付を致すうら三月まで此處に置て呉れまいう調へよ杯來る事はなからうが 覺「滅多にの参りませんが來ても只村役人々汚布合の書付や何かを持って來るだけの事で汚座います又お前さん方が泊つて居る内は他の者は歸へして仕舞ますからお心置なく汚緩くりと泊つていらつしやましヨ 丹「婆さん此處へ來たのは却つて仕合で有たと云

ひながら懐中から十兩取り出して 丹「これは誠に輕少だが兩人の手當も遣て置くから米や薪でも買つて貰ひたいと婆々に渡せば婆々の大きに悦び 覺「御心配なさいますな酒でも買つて來ましよと夫よと手當をよくして此處より三日程匿れて居ましたすると三日目の日暮方婆々が酒を買つて参り三人で酒宴をまて居りますと土間口から音の深い三度笠を肩に掛け廻し合羽よ千草の股引草鞋ほきて旅慣れぬ姿の男が入て來ました之れは繼立仁助と云ふ草賊で汚座います 仁「阿母家かと云ふ聲を聞くより早くお覺婆々は飛び出し突然仁助の胸倉を取り横頬を擲倒す打たれて仁助は不意に驚き 仁「阿母何をするんだ 覺「何も驚もあるものか能のめくと來やアがつて手前が意地を附けたばかりで悴を半死させる様おしやアがつて此奴と云ひながら又打ちます仁助と益々驚き 仁「ア、痛へヨ何あをするんだなア 覺「何も糞も入るものか此處へ來ひ名主へ引ひて往くとボカカ 打ながら引ずり行き樹蔭へ來ましたから 仁「なんだどうまたんだ 角「なんだおやアねへよ安間に入つて來てさ己れを比丘尼と成て居る身の上じやアないか殊にお容の居るのを知らねへか 仁「何だか突然おボカカ打ら分らねへそれよ哥々が半死したと云ふには何んだ 覺「うれば出たらめた己れ



云ふ事と眞實にそる奴があるものう汝と打たのは泊つて居る奴が二人居るうらいやと云ふ程  
 奇く打たなくつちや眞實にしないうらだ其客人は原丹治と名を云ふ奴で汝も知てる下  
 新田の後妻てれ梅の實の親のお龜が泊つて居るのさ澤山金と持てる様子だが丹治が已れと  
 切て仕舞ひさうな權謀だつたら改心して尼に成つたと云ひ哥々はお繩と受けて牢死した  
 と云て置たのに哥々の事と云ちやア化の皮が現れるじやアねへられた前も氣がさうないのう  
 仁「だつて何だの知らねへうらだアな突然に驅出して來て擲り附けた時は己ア何だと思つ  
 た 覺「汝さうして哥々はさうした 仁「哥々は北牧まで來て居る 覺「アア耳と貸しねへ  
 仁「貸して居らアな 覺「暗くつて分らねへと云ひなら耳の傍へ口と寄せ何やら暫くコソ  
 く耳語さ 覺「宜いうへ 仁「ろんなら恥度だ 覺「さぞとくわなへ様に九ッ過ぎに宜い  
 と仁助に別れた愛婆は顔色と變へて入て参り 覺「嗚マアね聲さて停坐いきましたらう 丹「聲  
 いたヨ何であんるに腹と立たのだへ 覺「彼奴は仁助と云ふ草賊で停坐いさまが停より年上  
 だもんでそのら智恵と附けて悪い者にしたのでは坐いさま 丹「れ前も年上で随分惡黨じや  
 ないの 覺「私の悪い事は前より知れた事ですが彼奴の爲りにさぞと働さ停と牢死せる程に





因果報ひ  
きたりて悪  
漢例る

亦旅於角

於かあ



原丹治

惡漢小平

繼立仁助



なりました。あら私に敵同志で憎い奴だと思てる所へズウしく入て来ました。あら捨て  
置けば此村の難儀になりま。そのら私が名主の所へ引張て往たら直ぐに縛はられ北牧へ送ら  
れました。丹「あんな悪黨は来ない方が宜しい。自分も悪黨の癖にと話しながら酒と酌み  
あつた角は丹治と酔わせやうと思つてひやみに杯と進めました。あらグツスリと酔ひまし  
て最う寝よう。と床に就ました。頃は雪は敷まして風音のみ高く聞へます。九ッ過に音のしない  
様に臺所口から道連の小平は覗きの手拭で面部と深く包み三尺餘の小長い柄へ草と巻た銅  
金造の刀と差し千草の股引に脚半甲掛で仁助も同く忍入音のせぬやうに一處に上りました。が  
盗賊だ。あら馴て居升れ角の寐處へ来て聲と密め小「阿母くく」  
「兇狼ちや不宜」  
「先刻仁助に云た通りおしねへつ。あれちやアいけねいよ」  
仁「本堂の傍に寐てゐるか」  
「本堂の前だ」  
ヨと指圖せるゆる小平仁助の兩人は振足して参り丹治お龜の蒲團の間に手と差入れました。  
は柳行李の中に金と入れて毎晩お龜と丹治の間に入れて寐て居るのよお覺が知て居ります。  
あら小平に取らせました。が其晩に限つて金と出してお龜が懐中へ入れて置いた事は少も知  
りません。あら小平はこれさへ盗めば宜いと心得スツと手と中へ入れに。ると原丹治が目



と覺し、盗賊と覺て立てるに遅らして小平が逃げ出す丹治は已れ遊がさしと杖端の刀と林  
 ると油壺婆か晝のうち刀を隠して置きましたら有りません其故に横合のら權立の仁助が  
 突然切り附けると引外つし手元へ繰込んで仁助の刀と拾取り、丹「邪魔するるといひながら  
 方に任せて切附る天命とはいひるがら仁助は其儘斬倒される之れと見て小平は堪らんと庭  
 の方へハラ／＼逃げ出す丹治は跡と追て往く其間に油壺は盗賊だと察し怖いながらも一生  
 懸命小兒と抱て胸巻との、へ表の方へ逃げ出す跡よりお覺は油壺と追掛行き谷川縁に一筋  
 道で樹の根に躓つと倒れるれ油壺の聲と掴で引掛り倒し、丹「此亞魔、何と問のたべらば  
 うめ金と渡して仕舞へ、丹「母子馴合て私の荷物と盗むのだな、元より手前の身ぐるみ  
 刺うと思ふのらた丹治は殺して仕舞たうら何でも手前が金と持てるに違ひないのらよこし  
 て仕舞へど取りにらゝるお覺は取られじと挑み争ひ、丹「人殺しくと怒鳴立る赤兒はチギ  
 ヤア／＼と泣出ましたゆゑお覺は思はず赤兒に心と取れハッ／＼と落しましたは紺縮緬の胸  
 巻と見て、丹「金だナと云ひるがら拾ひにらゝるとお覺は渡すといと互いに力と極めて引合  
 ひまると胸巻が裂けて中よりチツ／＼と落とるとたんに封が切れ黄金の花が近邊へ散らす

る處へ丹治は小平の逃げる／＼一目に追て来て此体たらくと見て小平の逃げるに拵はず密  
 然お角婆に一刀おびせのけるとお角はキヤツと聲と上げて倒れる其上へ乗しゝり喉元と  
 割つて居る背のへ小平がそつと廻り胸金造りの長いやつと抜き放し丹治の膈腹目掛けてウ  
 ーンと方は任せて深く突込まれ丹治はウンと仰反て身と顛はも所と足と踏みつけ猶も再  
 ひこじられて其餘息は絶へました如何に惡の報ひとは申しながら權立の仁介お角の兩人は  
 丹治の爲めに殺され丹治は又小平の爲めに殺されると云ふ惡人全、互に修羅の責苦に遭ふ  
 とは實に恐るべき事と御座いますお覺は今も原丹治の殺されるのを見て逃げる心もなくア  
 レー人殺し誰の助けて下さいと云ひながら小平の足に纏り附くと、邪魔するると足と搦  
 げてハッ／＼と蹴る蹴られてお覺はアツとばらりに逃るしく削りなせる二三丈もある船の下と  
 流る、吾妻川の中へ乳兒と抱たま／＼と轉り落ち生死知すに成ました小平は刀  
 の血と死骸の着物で拭ひ箱に納り暗夜ながら閃々する、金の光と見當に揺る揺る無茶苦茶  
 に手拭に包んだり袂へ入れたりして丹治の死骸と川中へ蹴落し又惡黨でも親子の情でお角  
 の死骸と庫裏の庭へ引括て墓と深く穴と掘り仁助の死骸と一處に埋り遺棄れれ小平は多く



の金と持たまへ何處へも送電して仕舞ました

お話替つて山口屋善右衛門の家では多助が毎日種々な物と拾つて粗末にならぬやうに貯めて置さざると斯くて其年も暮れて翌年になりまると一日の事で番頭の和平が且那樣どうの何と買つて戴きたいものでなア納屋穿きの藁草履と善「ハイハイ」藁草履は最う残らず切ましたらへ番「ハイ穿きやうが暴う御座いますし殊に此節は働きのものが多いので鼻緒が切れると直ぐに川の中へ投げ込んで仕舞まそので困ります津山入りまそのうらどうの些と澤山買た方がお爲めに宜しうらうと思ひますうら百足もお買ひ成まつて下さい番「どうのそれじやア入るたけな買いと話として居のと傍で多助が聞て居まして多「番頭さんくく」番「多助のへなんだ多「只今之れで聞きましたら藁草履が御入用ださうでんぞね善「ハイ入用だよ多「藁草履が入用なら私が買って貰うべし善「お前藁草履と持て居るのへ多「ハア些とべい藁草履と貯めやした善「さうの澤山もあるめい貯つてだけ買てやらう多「どうのをお買ひ成まつて下さい藁草履は一足幾許しやぞ善「さうさ一足十二文だな多「十二

文とすると河岸揚は職人が穿いたと家のものが穿いたりするから平均一日三十足宛入りやすが其中皆なが鼻緒を切ると棧橋から川中へ投げ込んで仕舞ふのを私い竹の先へ釘を打て夫を引揚げて置いて毎晩私が鼻緒をたつてギユツと真中を締めて置いたるきに水の中へ入つたんだから先より丈夫に成て居ります善「感心なものだなアどうだ番頭多「番頭さん貴所は算盤を取て店を預るものだから聞きやすが日に十二文の草履が五足で幾許にありやぞ番「丁度六十文になるのう多「ハア六十になれば年分には大へ事になりなすが一ヶ月で幾許にありやすといはれて番頭は算盤を取て番「エ、カウツと日に五足ヅ、デーヶ月に百五十足に成るのサ多「其錢は幾許だなア番「エ、ト一貫八百八十二文サ多「一年で何足に成りやぞ番「うるさいのウカウツ千八百足に成るのサ多「其金高はいくらだサ番「うるさいのウカウツ金三兩一分二釐と五百六十文に成るのサ多「目がはいつて居やすか番「知れた事ヨ多「それでは十年ではいくらに成りやす番「うるさいのウエ、カウツおや且那樣大きなものでございます一万八千足に成りやす多「其金高はエ番「うるさいのニ、カウツ大きなものですあア金三十四兩二分と七百四十八文も成りますが且那樣大きなもの



ですなア微塵積つて山となるの譬の通り十年で是程に成ります。多「ハア三十四兩二分と七  
 百四十八文あれバ國へ歸へつて家を建て足しになりやすナ。番「持て来なさい澤山もある  
 まい百足も貯つたかと思ふと多助が納屋から横庭へ運んで山の如くに積み上げました。多  
 「昨年からは随分貯つた。善「たいへん貯たなア幾足ある。多「ハア二年貯めたから勘定の  
 しねへが三千足もあんべいかナ。善「これの驚るただうだい番頭感心なものだナ。番「驚さ  
 ましたなア家でも草履の入る事いたいへんですなア。善「ヨシそれだけの薪し草履を買  
 積りで手前の丹精を買って遣らうが金ひ私を預るヨこれから手帳を拵へて一々付けて置きま  
 せう今日の預り始めだ。多「金ひ入らぬ先づこれだけの餘所の物を拾つたのぢやねへ家の  
 物を拾つたのだからこれの旦那様へ上げたい私が斯うして人に見せれば些どの出方のも  
 も草履を大事にしへいと思つてお手本に貯めたのでこれの私が錢蓄ふべいと思つて貯めた  
 のぢやアねいまだそれべいぢやアねい大く御奉公にしてある事があるがそれの最う十年も  
 經てがら見せたい。善「不思議な男だのうなんと番頭感心なものぢやアないか。番「驚きまし  
 たなア。多「番頭さんも目前べいの勘定で心の勘定がねへから何か難許入るか知りやアしね

い店を預かる番頭さんだから確かりしなれヨ。番「ハイ、異りましたと云ので番頭も六  
 きに氣か注ぎ主人も感服致しこれから追々多助が他の人に眞似の出来ぬ事を致しますお話  
 しは一と思つさまして申上ます。

第十三回

小平奸計奪三證書  
 多助慧眼破三騙術

鹽原多助は計らるも山口屋善右衛門に多けられ此家に奉公を致して居りましたが多助の行  
 狀の實明なのに主人は素より奉公人一同が感心致ました其多助の氣の利くと主人の用向  
 ばかりでなく番頭から小僧から家へ出入る者一同からおさんどんにまでも飽く飽めすが  
 決して慶祝でするのではなく眞實に致しますので番頭が肩が張つたと云へば直ぐに後へ廻  
 つて打ますエハんと咳拂ひをすれば直ぐに灰吹を持って往く風を引たと云ふと直ぐよお聲  
 者を呼んで来る少し病氣が重いと思ふと直ぐよ早桶を買て来るまさかそんな事もありません  
 まいけれども多助は少しも隙がありませんで稼ぎますのは追々金を貯めて國へ歸り養家へ  
 恩返しをしやうと云ふので後には地面の二十四ヶ所も持やうになりますますがさうなりますよ



は後楯と云ふものがなければなりません商人が大きくなるには資本を貸して呉れる金主と云ふものがなければ大商人にはなれませんもので御座います。茲に下野國安蘇郡飛駒村に吉田八右衛門と云ふ人が後の多助の荷主と相成ますが此人が三十五歳に成るまで江戸へ出た事がありませんのは此人の親父八左衛門は六十以上の年で御座います。が總て江戸の取引先きの事を致して居りますから八右衛門は江戸へ出て参りませんでした。が親八左衛門が不圖病氣付きましたに因て八右衛門が始めて江戸へ出て参りました。頃は寶曆十二年十二月の十五日深川八幡の年の市で其頃は繁昌致しましたもので餘り込み合ふから八右衛門は田舎漢の事でしたから恐れまして高橋を渡つて深川元町へ出て猿子橋の傍に濱田と云ふ料理屋がありませす其夜は雪がチラ／＼降出し眞闇です。から外はあまり多人數の合客はありません様子でありませすゆゑ濱田へ上つて見ませすと衛立を建て彼方にも此方にもお客が居ります。八右衛門が御膳を喫へて居りますと足利と猿田といふ所があつて其處に早川藤助といふ出船宿があります。丁度其主人が居合せまして思ひ掛けないから八右衛門の側へやつて参りまして藤一誠に暫らくで御坐いました。八右衛門様ヒヤア御座へませんか。八一誠よこれはどうも







久しぶりで逢ひました藤助とんでがんすかお尋ねべいと思つたがツイ無沙汰しましたハア  
藤助が館にお出になりました何の御用で、ハア私もどうか江戸といふ所へ来てへと思つて  
用たが親父が通者で江戸の取引の己がするから汝の家に住るといふから家にべや居りやし  
たが大した事でもありませんが親父が捕梅が悪いので手前往つて仕切を取つて来うとい  
ふので仕切を取りに来ましたヨ何んに取引先きの神田佐久間町の善右衛門が一番大へから  
彼方へ往つて一夜や二夜の泊つて来てもいいからといふが親父が捕梅が悪いからハア早く  
歸るべいと思つてハア藤助ハイ山口屋善右衛門の大くつて荷主を大事にするのの彼の位な  
業の無い彼の親父も中々荷主を大事にするが仲の善太郎と云つて年の若いが館く客を大事  
にするしそれにまた番頭の和平の客を大事にする第一彼處の家の養應が違つてハアハアさ  
うだそて親父に聞て居りやしたが私の顔を知らないから向ふで金を渡さねいといけないが  
そんな事のあるめへかねエー藤助ハアにそんな事ねへ貴所の始めての事だから親父様  
が往くより却つて大事にするだんべいヨハア親父も汝の始めて往くのだからこれを持って往く  
がいとといふので受取證文を親父が寐床で書て手紙と此八十兩の受取證文を持って来やんし







ましたから召上つて下さい。八「これは賊も有り難う怪我とあれば仕方がないが金を持って夜歩行ねへがい、ヨ私やア田舎漢で始めて江戸へ出て来たんでナアに醫者にも及ぶめいが横つ腹が突張つて仕様がねい。女「貴様些とお横におなりなさい。男「姉さん此近邊にお醫者様はありませんか。女「賊もどうも此近處はお醫者様は御座いません濱町まで参らなければ御座いません。男「そうかい枕を貸してと八右衛門を察かしまして彼の男が側で擦て居りますうちに八右衛門は宜心持になりましたからスヤ〜と察まして暫く経て目が覺めて見ますと彼の男は居りませんゆゑ起上つて手水も往うと思ふと立てませんそれよ舌がつり上つて口もきかれません。八「ハテナ身体がしびれて歩行ねい起事が出来ねいホリヤ困まつたな女中衆〜と少しも舌が廻りません。女「どうかありませんか。八「今茲に居た人は如何ですか。女「彼の方はお醫者様を探して来るから少し貴様を察かして置いて呉れと仰しやつてお出になりました。八「ハセナ己ア此處へおめた包さの腐蝕さのはさうしなさ。女「あの包や何かを此處へ置いてはいけなからと云つてお連れの方がお脚半までお持ちなすつて御出かけになりました。八「ソラア盜賊さア。女「大はきな聲を成すツチやアいけません。八「盜

賊だア盜賊野郎〜早く親爺と呼びにやつて呉れと八右衛門は睡いで居りまを又山口屋善右衛門の宅ではろんな事は少しも知りません其頃商人方では夜の四ツ時にふれば戸と締めて仕舞ひます店に子僧が手習として居りまを此方には番頭が帳合と致して居りますと土間に筵敷いて頻りに草履と拵へて居りますのは多助で御座います。男「ハイ御面下さい〜小「誰様ぞとナ。男「少し御面下さいと云ふのら小僧が戸と明けるとはいつて来た男は半合羽に千草の股引に草鞋がけで一本お太刀と差して手には小包と掲げたま。男「ハイ御面下さい。小「何方様のらお出で御座います。男「エノ私は下野國安齋郡飛騨村の炭荷主八右衛門と申すものでお坐います。番「ハイ〜此方へ〜。八「毎度親父は有り出て居りまして私しが此方へ参りましたのは初めて、御坐いませが親父が病氣で寝て居りやして床で燈文と手紙と書て私が代に來ましたが此方では誰様もお變りはありません。番「エ、ね、ねには承わつて居りますが能くどうも貴所がお出向で御座いませ毎度主人と貴所のお噂はのり致して居りましたマアお上んなさい。八「上つては居られません平常なら宜が親父が頼らつて居りまをのら直ぐに扇橋まで任つて船へ乗つて歸る積りで御座へますのらどうの



之れへ書文と持て参りましたら八十金お渡ししと願ひますと信に三貫目段と願つたから夫丈の代と載いて船賃は跡で宜御座いますとのら八十金はさうの只今願ひませ。多「へい」と云ひながら手紙と讀上げて見ませと金と八十兩俵に換して呉れるとあり受取書文と見ると八右衛門の書たのに違ひないうら安心して。多「若旦那様へ」兼々お時々の八右衛門様がお出でになりました。これは私共の若主人で今晚の主人は居りませんうら代と致しませので入。多「これはさうも驚て親父の承つて居りましたか好若旦那で貴所が善太郎様で御座いますとの書頭さんには和事さまと仰いますのへさうの此後とも心安く願ひませうれではさうの金子の處でお渡しと願ひます。多「うれでは毎でも砂糖と糖引とさ成海に上るんでその貴所お持下さいますその若し御迷惑なら小僧に持たして上ても宜しう御座いますとの何にする是非御一泊と願ひたう御座いますか親父様が御病氣の事では頼り御座いませんでへ。入「へ」結構で御座います田舎では糖引は結構で御座いますのら扇橋まで持つて参りませう。多「うれでは八十金差上げて一貫二百文のお船賃は跡に致しませといひながら金の約定として居りました今後さうとさる。多「書頭さんへ」金と渡すのは容易に渡さねへ方がい

直と知てる人じやアねいし初りて来た人だうら旦那が聞つて来て話してしてうら渡した方がようがんと。多「餘計な事と云てるお前の知てる事じやアねい。多「後ろの方うら口と出してはすみませんが貴所は飛駒村の八右衛門さんに違へありませんか。入「はい私はうれに相違ねいが深くお問礼しとなさるのには私と疑々んなさるのうへ。多「うれでも私ア斯うやつて暗へ所で辭と掛けるやア濟ねへが貴所は本統の吉田八右衛門様お違へねへう。入「本統の虚のといふのは私と疑々るのう。多「お親父の手紙と持て来たのが確かな證據なのに何とを疑々りなさいませ。多「本統を私少し承りてい事があります。多「コレへ何と云ふ。多「これは山出して何も解りませんうらさうのお腹とね立ちなさないで。多「アア書頭さん黙止てお出なせへ私聞らねいければならねい事があるが。多「入右衛門様とやら貴様は下野殿でねへら私が聞きたがさうも貴所は下野の者じやアがんとすめい。入「私は下野の飛駒村の者に相違ねへがお前は何といふの。多「アアはお前さんの辭は下野も上州も武州も方々の辭が交つて居るやうでがんと。多「お前何と云ふの。多「黙止て居る。多「それじやア書頭さん私が暗い處で何もさう云て居ても分らねいうら其處へ田やんしやコレ入右衛門



門さんアは、どうもはア騙と事は出来ねへもんだ久しよりで逢たがお前己と忘れたの  
 いお前は道連の小平といふ草賊だつてア、小「イヨウと小平は賊致し流石の悪人も跡へ  
 下りました、多「嘘は吐けねへものだなア小平ハア斯知れてしまつたら己れは草賊だと云  
 て歸つた方が宜らんべい番頭さん此奴は道連の小平といふ草賊でがんとヨ、番「イエー草賊  
 のいろれたから夜は戸と明けぬい方が宜といふのだ大變な騒ぎが出来た、多「アハハハハ、  
 既に八十兩と云ふ大金と奪れる處づつて去年汝が己れに刀物突付て既の事で殺される處と  
 助つて此處に居るだが汝はまアだ悪事が止まねへの、小「妙な處で逢つたあア而して貴  
 様はどういふ譯で此處の家お居るのだ、多「どうして居るつて已ア金と貯めて國へ歸るべ  
 と思つて此處な家で移いで居る處へ汝が来たうら分つたのよ、小「エーオイ番頭さん私ア道  
 連の小平といふ草賊で實は少し譯うあつて此の番付の手に入たうら八十兩充分と騙り取ら  
 うと思つた處が山出しの多助の野郎に見あはされ化の皮が顯れてしまつたらうら此儘じや  
 ア歸れぬいサア此の大きな家蓋骨のら突き出され、は本望だサア突出して貸はう、番「突さ  
 出すつてどうもこりやア困つたと番頭の頻りに必死致して居りまを處へ此頃は當今とは違







ひまして人方が御座ませんから御籠で大急ぎに参りましてトン／＼／＼鳥此處とれ  
明け成まつて下さいと今度の眞實の吉田八右衛門と云ふ人が涎／＼／＼滴らし入つて参  
り只見れば先程の奴が自分の身形りで居りますから八右衛門は突然此野郎と云ひながら一  
生懸命に這ひ上がつて小平の胸ぐらと掴んで放しません 八「此野郎呆れた野郎だ己が身  
利のねへやうにして己れが荷物から脇差のら大事な書付まで盗みやがつた盗賊／＼此野郎  
／＼」小「静のにしるエと云ひながら八右衛門の手と逆さに捻つて其處に投げ付け草履穿さ  
の儘でドッサリと店先へ上り胡座をうきまして 小「ヤイ百姓賢は己ア小平と云ふ草賊だ上  
州で人殺のら足がつか居られねへら其場とにけ猿田船へ乗て江戸へ着き先き濱田で飯と  
食いながら聞いて居ると手前が此の山口屋善右衛門へ八十兩の爲換と取りに来たと云ふ事  
と聞ちやア遠ざねエ地獄耳汝の跡と付て来て轉んだ振りで荒稼ぎ頭突きと云つて横腹と頭  
で打つて息の音とめ御氣の毒だと介抱して吞ませた薬は麻痺薬だ手前の身跡がさのねエラ  
ちに衣類のら懐中物まで引さらつて遁るのと盗人中間で頭突と云ふのだあの時獲つた書付  
のらまんまと首尾よく八十兩いゝ正月としよふと思つた所が打て違つて山出しの多助の野



郎み見顯はされたらもう破れぬふれたサア突き出せ〜と云ふので店の者は大きに驚き頭と呼びにやるやら何にやら騒ぎ致しますけれども小平は鐵挺でも動かさないので持て餘まして居る所へ歸つて来たのは主人善右衛門でこれより小平と奥へ連れて参り意見と致しますれば話は次回までお預りに致しますせう

第十四回

乞食資結約在、爲自家之計、損金修路將謀公衆之便

山口屋善右衛門の宅では道連れと緯號とされました草賊小平が強談に参りましたが只今では強談杜騙とする者も悪才に長て居りまして種々巧者になりましたが其頃は強談とする者が商人の店先へ参りサア打さ殺せと云てドツカリ坐り込みますと表へ黒山のやうに人が立ちまして外聞が悪いのら餘義なく十の廿の金と持たして歸へしたものです。が只今ではさういふ事は出来ません直ぐに巡查が参りましてハアコッヤア分署へ参れなんと申すのら中々出来ませんが昔の大家程のういふ事とされると困つたもので山口屋善右衛門は宅へ歸つて見ると此騒ぎでそのら直ぐに醫者と呼びにやりまして八右衛門と療治して貰ひ表のら此

種な所と覗き込まれてはならんうらと云ふので奥へ通さうと申しても小平はさうしても動かしませんでした。が小平も段々考へて見るに此處で云ふ事と聞かなければ爲めに悪いと思ひまして奥の六疊の坐敷へ通りましたすると主人善右衛門と始め多助も番頭も参りまして「善」コレハ小平さんとの始めてお目に掛りましたが私も今歸つたばかりで委しい事は知りませんがね前さんは私共の大事な荷主に毒藥と服せ身体と利のなくして證文と持てのたりとしやうと思つて店へ来た處が宅の奉公人の多助がお前と知て居て化の皮が願れたのら突出して呉れると云ふさうだが悪黨の方にはさういふ法がある知らぬいが宅では細付と出す事は好まない多助が見顯はしたのは腹も立たるうがろんな事と云ても仕様がぬいゝら私が得心の上で甘雨上げやう騙つたと云へばお前の罪も重く成り私も心持が悪いのら此甘雨と持て歸へて呉れ殊に暮ではあるしするのらこれで辛抱してお呉んなさい 小「へい有り難う御座いやそコレハお初うにれ目に掛りました私ハ小平と云ふ草賊で御座いやと先刻番頭さんにいふ通り八右衛門といふ荷主が山口屋へ爲換と取りに往くと云ふのら少しでもさう云ふ事と聞いちやア打捨ちやア置けぬのら暴つばい仕事だが頭で突いて毒と服ませ生突と違



つて此方の店へ来た所が山出しの多助の畜生に見顧はされた上うらは私ア細にのつて出るのは承知サ私がドコと組んだつて外とは違ひ山口屋善右衛門さんといふ立派な家だのら廿や三十の目腐れ金と貰つて歸つたと云つちやア盗人仲間へ恥辱だサアどうの突出して下せい私が突出されればお前さんには遺恨はねいが多助手前と抱いて往て臭い飯と喰わせるのらさう思へ 多「何處へ抱いて往くのだ 小」わらねエ奴だ牢へ連れて往くんだ 多「フッン牢へ往くのと抱いて往くといふのの手前これで黙つて歸れば旦那が金と下さるのら黙つて歸つた方がよらんべいせ 小「黙つて居る此の財樵野郎め引込で居やアがれ 善「マアこれの山出して何も知らない者だのらそんなに腹と立たぬいで歸へつてお呉れナ 小「インヤ歸らねいッたら歸られぬいやどうせ細つた素首だのら三尺高い處へ板付になつて小塚原の鈴ヶ森へ懸された時にア、好氣味だと云て笑つて下せぬ其代りに多助と抱いて往らぬくつちやア腹が醫ねへのだ 多「コレ小平それじやア是は旦那様が事と分けて云ても手前は育のぬいのう 小「尿でも喰へ 多「旦那様實に相済みませぬ貴様に迷惑と掛まそめへと思つるにどう云ても聞らぬいオオ小平旦那が慈悲で二十兩と云ふ金と呉れぬといふにそれ

へ聞かねへと云はし仕様がねへがコレ小平汝は情けぬい人だなア私から事を起して旦那様又御迷惑を掛けては濟まねへし汝を突出して此家に難義の掛るのを見ては居られねへから己は悪い事をした覺へはねへが連れて往くなら勝手よしる汝の先へ立て繩にかゝるべい殺すなら殺せだが汝幾計氣を練んで己を殺すべいとしても人間と云ふものは命の盡さねへ中は死ぬ氣遣ひのねへものだ毒命の盡きたらいくら助かりてへと思つてもためハアそんな火の中水の中でも定命の有るうちは死なねへもんだから殺すなら殺すともどうとも勝手したがいんだがマア能く考へて見る實に悪黨と云ふものは人の慈悲も辨へねへと見てそんな横倒しあア事を云て此宅で斯う云々那ア云て困らせる己ア汝を悪まねへが其心根が如何も不便だから一と通りの事を云ふだ汝ニ此處へ八十兩べいと金を強談に来る爲め大事の荷主様よ毒を服ましてヨ世界の人の身体と不隨なる様よしてさうして汝工種々な物を盗み脇差い差し風呂敷背負て脚半を掛け草鞋穿さよ成て此處へ来て田舎漢の假聲を遣て取だ所が只た八十兩べいの金をそれに引替へ己ア旦那様杯は坐蒲團の上よ坐つて煙管を嚼へハチナと一つ首を捻り考へると直よ五萬や八萬の金を儲ける事を御存じでいらッしやる旦那様に比



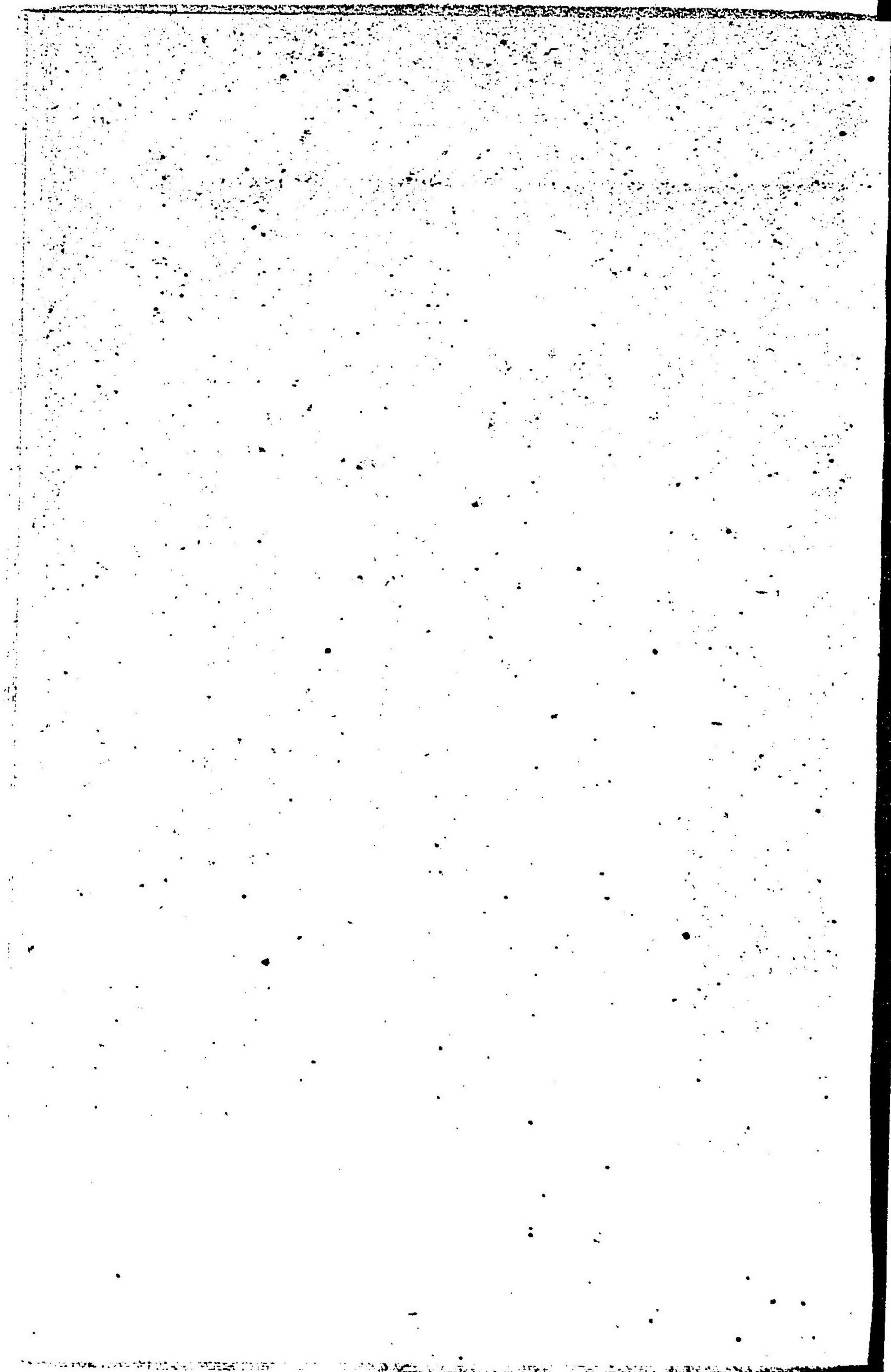
べれば汝が稼ぎは誠に少せへ事此處な臺所の洗しの下より未だ小せへ且那様が悪い奴に  
 二十兩の金を呉れべいと云ふ心は大したものだまた汝が取り損なつた金は只た八十兩何と  
 マア餘り小せへ稼ぎて氣の毒だヨ已ア此處な宅も奉公に来て今では斯うやつて草鞋を造り  
 草履を直し大騒い遣せ小せへ事をして居るが今に已れ家大かくなれば五萬や十萬の身代よ  
 なるべし思つて御奉公して居るよ汝エ壯年して稼ぎ盛りで有りながら只た八十兩べいの金  
 を取り牢に入て命を落すかと思へば如何にも氣の毒で其心が虫よりも小せへから已ア感然  
 せなんねへから意見を云ふたエーカそんな急いで獄門になりたがらねへで且那様が二十  
 兩下されば幸へだアから頭でも割落かして出家よなるか又は堅氣よなり誠の商ひでもする  
 なれば今までして悪事も自然に消へ臺の上で死なれるやうになるがどうだ此處で一二十  
 兩の金費ひ改心して眞の人間にならねいか汝エお袋の又旅のお角と云て五十の坂を越して  
 居ながら汝と一所に己ア家へ強談に來たりお袋を獲つたりして己れ能く知てる汝お袋の惡  
 黨だか親父いはどうだか知んねへが大方女房のお角は惡黨で又汝様な子が出來たから離縁  
 をせねばおんねへといふ所ぞ惡黨は惡黨連れだからお角が汝エ連れて出たかも知んねへが

其時は親父か善人ならば別れた跡の心持はどうだへア一彼奴が眞人間ならば己れ心配はね  
 へるのを惡黨の子が出來たから仕方なく追ひ出したがどうか堅氣になつてくれろ悪い心を  
 廢め眞人間に成れば宜い今一度逢ひていもんだと親父が壯健で居れば汝が事は片時も心に  
 忘れる氣遣ひのねへもんだから親父に對しても誠に己ア氣の毒に思ふだ己ア汝を惡むじや  
 ねへ感然だと思ふから惡事を止めるコレ堅氣に成れや大騒ぎ遣て首を投げ出して取つた所  
 が高が八十兩計の小さな金旦那様の様に一時に二萬も三萬も儲ける事を御存じの人に比れ  
 ばおんまり小せへ考へだアから止めろやアと眞實心から説き諭され悪人ながら小平は肝  
 に感じましたか感然として腕を組み俯ひて何か考へて居ましたが暫くして首を擡げ多助の  
 顔を熱々見まして「小ヤイ多助此野郎は妙な事を云ふ此番生申し旦那へ成程只今山出しの  
 多助が云ふ通り斯う遣て草鞋穿になり田舎漢の假色を遣ひ大勢を騒がし首尾よく往た所が  
 唯た八十兩成程是れは小せいそれに引換へ旦那杯は坐蒲團の上で脚へ煙管をしながら一つ  
 首を拾れば五千も八千も儲かるといふ其人に比れば虫より小せいと云へば成程小せい夫よ  
 此野郎の云ふ通りお袋は私の餓鬼の時分離縁よなり私を連れて出て往く時親父は腕を組ん



でポロリポロリ泣きさみうら己の悴に新様な悪黨が出来るとい何たる因果だらう此餓鬼が眞人間ならばと云ひながら下と俯いて居たが今まで新様な事は誰にも云はなかつたの此野郎は妙な事と知てる些と異つて居らア此畜生 多「何が異つてる巴ア方で異つてるじやねへ汝エ方の根性が異つてるもんだアのら當然の正直な事と云ても汝がには違てゐる様に聞へるのだ巴ア正直の事と云ふだヨ 小「可笑い畜生だ種々な事と云やアがる申し且那へ私やア二十兩は入やせん此奴の前へ對しても金子と貰つチヤアさまりが悪くつて歸られやせん且那へ私は何んだの變な心持に成て強い事も云へなくなつた 多「駄目だるア早々と飯へれたが折角金へ呉れべいと仰やるこんだのら戴いて往くが宜い 小「ナニ金子は入らねへる且那へどうの裏口のら密と出して下だせへと小平は悄然果て衣類のら脇差まで獲らす置さこそく」と裏口のら出て往きました跡では皆々ホット息と吐き安心致し尙ほ荷主八右衛門に手當と致しまと二日程経ちます中に大きに口もきける様に成りました 番頭「ヤア御芽出度御座いました 入」どうもハア何とも始めて参り斯云ふ御厄介にならうとは心得やせん事で併しお蔭さまで命には別條ねへて大きに有り難うがんした國の方へは仔細と書いて二三











日後れて歸ると書面と出しやんしたるら安否もしていが此方で危ねへ事金と取られやうと  
したが多介とんとやらの意見で盗人も驚け情然果て、歸へつたは慶へ奉公人だねへ私驚げ  
やした年未だ若いかねへ 主人「誠に妙な奴で時々變る事と申します 入「免も角も多介とん  
とお呼びますつて下せへ私も御目に憑つて置ていひら 主「多助や〜一寸来る 多「へいな  
んでがんと 入「ヤア多介とんお前實に感心する人だ盗人に意見とするのと私憤で聞て居した  
がお前が此盗人の馬鹿野郎と云ふのら手向ひでもするのと心配して居ると盗人が首傾けて  
變な事と云ふ奴だアと云て驚げて飯たが誠に妙な人だお前のれ處で八十兩の金子取られね  
へで誠に有り難いと云ひるから金子と紙に包み 入「たんとではねへがどうの此二十兩取て  
置て呉れ私江戸見物些と長くすれば小遣にあつて仕舞ふのだが餘り饒へ奉公人で濫儀と被  
て炭と據いてる人には珍らしいのらどうの之と取て置てお呉んなせへ 多「宜敷御坐いやす  
いりやしねへ 入「少しはのりだが年季が明けて國へ飯る時の足にもならうのら取て置て呉  
れ 主「有り難い事で大金だが折角の悪召だのら戴いて置くのよのらう 多「有り難うがんす  
が私金殿さますめへ 入「そんな事と云ひすに取ておけ 多「何も貴所に仕た事じやねへのら



私戴さやせん此處な家の旦那様には命助けられ大恩と受けた御主人様と大切に奉公して居りやす所へ間違が出来やしたゆゑ家の事と家の奉公人がそるのは當然でがんとらさうの二十兩といふ金と請取る譯はがんしねへら貰われやしねへ駄目で御座りやす 主「折角仰やる事たのら戴いて置さるゝ 多「入右衛門様貴所私に禮としていと云ふが主人へ義理に斯う遣てお出しなんその又眞實心より私に呉れべいとするのへ 入「誠に困りやすが何にも見へも糸瓜もない唯お前の心持が如何おも感心だらうら出そののだらうマア眞實の心より上げろのだ 多「うんならさうの金で呉れねへでお願が有りますか叶へて下せへやせう 入「私に出来る事なら叶へて遣りやせう 多「それじゃアいけねへ儘に叶へて遣る何んでも聞くと返答とぶらなさい 主「そんな事と云ふ奴があるもの併し入右衛門さん此奴の事でもら差したる事でも有ますまいのらさうぞ願と叶へて遣て下さいませ 入「ようがんす何んでも叶へて遣りませう 多「ア、有り難へ此家へ奉公として外に何にも懸へた事はねいがよくく十年も経ち年季が明けて炭屋の店でも開く嫌な事が有たらば其時貴所方より千兩の荷と送ておくんませい 入「エ、千兩へ魂消たねへ 多「魂消ねへでも宜い唯買らんじやがんせ

んが貴所の方より千兩だけの荷とマア先へ送て呉れれば私の荷と賣りこゑして貴所の方へ金入れるだ金入れれば又荷送て呉れる譯にするのら貴所も仲間と得意先が一軒殖へ私を利益と見るだアから互ひに得の有る事だらうら恥度送つて下せへ 入「よし其時は恥度千兩の荷と送てやらう 多「それじゃア若し荷送る事が間違つたら千兩の金と只道らうといふ書面と一本下せへ 入「コレハ面白い書て呉れべいと直ぐに魂箱と取寄せとらくと認め店出しの折には必ず千兩の荷と送らうといふ証文と書き印形と捺して多助に渡と多助は大きに悦び主人善右衛門に預け置さまして入右衛門も國元へ飯りました是れら多介は主人大事と奉公と致して居ましたが山口屋善右衛門方は毎度申上まるとる通り名に負ふ大家の事で御座いませうら大名様方にもお出入が澤山御座いまして夫れが爲めに奉公人も多人數召使ひ又出方車力なとも多分に河岸へ参りませうもゑ盛所ふは始終膳が二十人前位は出し放しになつて居り出入のものが来ては食事と致します多介は此家ふ足掛け四年の間奉公して居り寶曆十三年の六月政元あつて明和元年と相成り其年も暮れ翌年明和二年十一月廿六日の事で御座ます多介は毎日く炭と車に積み青山信濃殿町の青山因幡守様の邸へ往させ



るる四谷へ来て押原横町へ車と待せ置さ那處ら信濃殿町まで車力が戻と扱いで参りませ  
 此處に信濃守様のお邸がありましたら此邊と信濃殿町と申すので多助は此日大きに草  
 臥れましたも糸ナト遅く暮れらつた時分に飯つて参り 多「ハイ只今飯りました 主「大分  
 遅かつたのう 多「大きに遅くなりやんした 主「何處へる寄り道でもして居たの 多「モロ且  
 那樣お願ひが御座います私煤掃の時に頂戴した御祝儀や荷主様や出方の者ら心附けとも  
 らひ貯めて皆お預けに成て居りやんすが彼の金子に足しなまつて私に送うぞ二十兩貸し  
 て下せへ 主「アイ廿兩それは貸しも仕様が何にするのだ 多「少し譯がありやして買物があ  
 りやんそのら送うか貸して下せへ 主「買物があると云つて二十兩と云へばお前の身に取  
 ば些と多とざるやうだが一体何にするのだ元に通つてはいけなないよシカ何も別に道樂も  
 ない男だから心配もあるまいが送うしたもんだらうのう和平せん 和「元喰ひ一つしねい堅  
 い男ですが二十兩とい些と大金です元に通つてはいらんせ 多「借元十事には三文も遣ひ  
 やしねい天下の爲めあら遣ひやす 主「大きな事と云て何にするんだ 多「左様なら且那樣申  
 上ますが借毎日一戻車に積んで青山へ行きやんすが押原横町のお組屋敷へは車と曳込

む事が出来やしねへら横町へ車と待たして置て那處ら七八町の長い間貸借いで行きや  
 んそのだが來年の二月頃までは霜解がして草鞋でも草履でもたつて歩行けねへ霜柱がハ  
 一尺五寸位もありやんして其霜解の中と歩行て参り飯りに水戸橋前の砂利の中へ入るもん  
 だら草鞋も忽ちぶつ切れて日に二足位は入て誠に元だアから借思ふに押原横町から長安  
 寺門前まで押原通りへスツツと残らず支着石と二様に並べて敷詰めたら誠に路が宜く成て  
 昔の仕合せだと思ひやんそので石買て敷きていら金二十兩お貸しするまつて下せへ 主「  
 ウ〜お前も分らねへ人間じやアねい神田佐久間町のもが四谷の押原横町へ石と敷い  
 てどうするのだ入らざる餘計ナ事じやアねへが殊に町内には組合もあるし元ある事だ 多「且  
 那樣お言葉と返しては済みませんが貴所のれ考は些と違ふと思ひやんそ神田佐久間町と  
 四谷の押原横町との町内が違つて居るのらと思召ては間違ひませソリヤア町内は違つて居  
 りやんそが押原横町の者も佐久間町と通る事もありやんそし又神田の者も押原横町と通る事  
 もあつて天地の間の往來で世界の人の歩行く爲りの道をも借考へます江戸中の人ばかりじ  
 やねへい遠國近在の人も通るのら石敷いてあれば往來の人がこの位助るのら知んねい又此



處の家から毎日彼處へ旅と送る時出方のものと五十人として日に十足の草鞋と切るとした所が大い事だ一足と十二文と積つても千足万足となれば何程あるの知んぬいふら夫よりは石と敷き詰めて置くに餘程得でがんと情聞いて見たら百年は受合て持つといひやんした極堅い幅廣の長い石が一枚五匁だと云ふのら十枚では五十匁百枚で五百匁だのら四百枚で二貫匁はだけでも敷けば百年位は持つ草鞋の切れることもなく貴所のね得にもなり天下の人が歩行く度にどの位助あるの知んぬへら世界の人の爲めに石と敷きやんすので決して四谷の押原横町と見て敷くのじやアねへ矢張れ宅の前へ敷く心で居りやんす 主「成程恐れいりました威服だのら和平さん 和「迂濶口出しは出来ませんなア此間の藪草履の勘定で書きましたよニリヤア殊に依たら得がついて返ることがあるのも知れません 主「二十兩出して石と敷くのは宜いがお組屋敷で彼はいやアしないの 多「それをも心配だのら彼處の手前横町に石屋がありやすのら石と敷いて谷められやねへらと聞いたら傍には取寄町の真頭が立て居やんしていふには己れがお組へ往て居けり果れやうと親切に石屋の親方と傍と三人で一所に参りお組屋敷のお頭に届けやんした 多「お組も段々次第と聞き大さに成心な

とだ往來の者の仕合で決して谷めねへら早やと敷くの宜いと實はお組のお頭も得心なせへやした事です 主「早いもの威心だるんら早速金子と持て往くがよいと金子と渡すと多介は金子と懐に入れ提灯と携けて佐久間町の家と出て塾堂前に掛り櫻の馬場へ上つて参りました只今では那邊も開けて佐藤先生の病院があり學校もありまそが其頃は樹木が生茂り櫻の馬場の邊りばお郎はのりや死んど日暮のら往來するものもなく時々釣盜杯が出るくらい淋しい所へ今多介が袴脚履と穿きスツ／＼やつて来る跡のらヒョ／＼冷飯脚履と穿き半合羽に小短お太刀と差し手拭で鼻被りとし脚履穿で田舎歸りといふ様への男が多助の傍へ寄り 男「ヤイ多助待てと聲と掛けましたが是は何者で御座いますと次に申上ませう

第十五回

教「危急一角右初名其子  
 教「貯蓄善右更願其二人

多助のお話も大分長らく續き追々結末の方に相成ままた扱多助の道普請の金と持て四谷の押原横町へ出らける途中で呼びつけられましたゆゑ立留つて 多「ハイ誰でがんとおただへと云ひながら提灯の下うら透して見ると道連れの小平で脚履いますゆゑ喚聲致し跡へ送



る小「ヤイ多助三年跡に手前能く己に赤腫とか、せやがつたナ多「汝未だ悪事が止まねへ  
る小「止むも止まねへもあるものう彼の時は手前の爲りに化の皮と現わされ立端と失つた  
うら悪事と止めて辛抱するとは云つたが實は手前と遺恨に思つて附けて居たのだが忙がし  
い身の上だうら奥州へ小隠れとして居た所が又ツキが回つて漸と江戸へ出て来て通り掛つ  
た山口屋の前で手前が提灯と點けて出のける時に主人が金と持つて居るから氣と注けて往  
けど云つたうら何んでも手前の懐中にたんまりあるだらううら出せ金と強奪り裸體にそる  
のだ殺しやアしねへが身體に疵と附けて三年跡の返趣と返へそのだ金と出せ多「仕様が  
ねへ性分として汝悪事が止まねへり己があれは迄まで云つた異見と用ひねへて悪い事とす  
ると云ふ心根が如何にも情けねへよとせなつてせうして此金は遣られねへ世界の人の爲め  
に遣ふ大事な金だ小「エ、出しやアがれと云ひながら多介の胸ぐらと取り力に任せて突き  
飛中突れて多介はひよろ／＼と横に倒れろゝとしましたがやつと踏み堪へながら多「ナヨイ  
とるせうしても金は遣られねへ誰が来て呉れ／＼と怒鳴るにも捕はず小平は拳と固め  
て力任せに打落せば提灯は地に落て燃へ上り小平は多介と拾ち倒し乗りろゝつて續け打ち





二四一



二四九



にぞる此時に多助の盜賊と何んとの云へばよいのに唯痛い〜と云つて居りませぬ痛いは違ひない誰も助ける人はありません多助は金と奪られまいと拵み争ふ小「此奴小力があるなど云ひながら懐中より匕首と取出しサア出せ出さなければ殺そぞと刃物と目先へ突付る時小平の後の方に立たる一人の士が突然に小平の利腕と取つて逆さに捻ぢ上げエイの掛聲諸共に投げ付けますると前なるお茶の木の二番河岸へ逆さんばと打ちゴロ〜とぶんと陥りましたゆゑ多助は地獄で佛に逢つて心持で多「危ねい所とれ救ひ下さいやして何處のお人だか有り難うがんしたア、痛い頭と割る程打れた丁度二十七打ちやんした 士「打れながら勘定として居るものがあるもの貴様は何處のものだ 多「ハイ私は佐久間町の山口屋善右衛門の手代多助と申しやんとが仔細あつて今夜四谷へ往く道で路連れの小平と云ふ盜賊に逢ひやしたが三年跡儂が異見としたのと遺恨に思つて儂と殺そぐいとぞる所とお蔭様で命が助のり誠に有り難うがんと 士「ナニ多助とナ左様かと云ひながら彼の士は宗十郎頭巾と被つたまゝで後に提燈と提げて立つて居ます御家來と見返つて 士「コレ吉次少々明神下に買物があるのら遅くあるのら知れんから先へ飯つて且那様は跡うら直ぐに飯へ



ると御新造にさう云へ 吉「ハイ、それでば提燈と置て参りませう」 士「ア、却つて燈の  
 い方が宜いから持つて往け 吉「ハイ、左様なら先へ参りませう」 多「オイ、お供さん大きに有り  
 難うがんとしたと云ふ間に早や家來は急ぎ驅け下りませす跡と見送つてお士が宗十郎頭巾と取  
 つて首へ巻き 士「コレ多助誠に懐かしうつたな」 多「ハイ、貴所は誰人でがんす 士「三ヶ年  
 前其方が屋敷へ参つた時は義理あればこそ親子と名乗らず面難く其方と飯へした跡で母の  
 愚痴ばりり申して泣いてはうり居つたの皆手前の爲めと思ひ態と嚴しく云つて飯へしたの  
 八歳の時に別れたもる碌々顔形ちも分ないが其方の實の親の搦原角右衛門であるど 多  
 エ、親父様のア、逢いたふ御座りやしたと云ひながら泣き出し袴に取付き 多「モン三年跡  
 お邸に参た時に貴所が己ア實の子じやアない全く百姓角右衛門の子だが同じ名前の義理で  
 汝と育てたのだ自分の子ではねへど縁切つて向へ遣た義理合と立て仰りやんしたうら顔と  
 も見ずに飯りやしたか彼の時の御意見が身に染み渡り山口屋も只今まで辛いのと忍んで奉  
 公して居やんす汝決して悪くさして國出た譯ではうんせん跡で細にお話と致しやすうら  
 申せば却て御苦勞と掛けやうと思ひ委しいお話と致しやせんたつたが只川一筋向のお邸に

兩親が有りながら御顔と見る事もならずせうして御出でなさるの壯健で御奉公なさるのと  
 人の噂と聞ては悦んで居りやんすが貴君も追々取る御年病み煩ひのねへ其中に一逼り顔が  
 見てへと思ひまして信心して居りやしたとせうを債國へ飯り家と建るまでお壯健でお出でな  
 すつて下ださる様ふと思てる願ひが届いて汝が實親の角右衛門だと仰て下せへまして債何  
 より嬉しく有り難う御座いやす 角「此方に於ても實に悦ばしめ段々様子と聞けば山口屋善  
 右衛門方へ忠義と盡し實貞にして居る由誠に感服なるを屋舗内でも其方の評判が宜しいの  
 ら陰ながら悦んで居た又沼田の角右衛門の分家太左衛門と申すものより書面が來た所なふ  
 ら後妻の悪心よりと其方の妻の必得違ひより多助は家出と致せし跡にて家は潰れ多助には  
 聊も悪い所はないと云ふ事が知れたゆゑ能々な仔細もあらふと常に其方の噂は有りして居  
 つたどうの身躰と大事に奉公して國へ飯り立派に鹽原の家と立ていよ 多「ハイ、家と立  
 てへと思ふばのりに此様な難儀と致すのでがんその親父様に此處でお目に掛らうとの實  
 に思ひやんせんでした有り難い事だが提燈と持て往て仕舞やしたうらお顔が見られないの  
 ら何處か明るい所へ往てお顔を能く見てへるんでがんす 角「左様ならそれまで同道して參



多「お郎までお供して往さお母様にもモウ一遍お目に掛りていもんでぞ 角「いや、  
 また逢ふ時節も有らう夜中金なと以て外へ出るナ山口屋善右衛門の宅まで送て遣う 多  
 身分が違ふら仕様がねへが貴父でもお母様でも加減の悪い様な事もならんべいが若有た  
 らば山口屋の手代多助と云て呼びによこして私達ばしておくなせいヨ 角「サ、宜しい其然  
 へた提灯と捨ひナサア同道致さうと一方は戸田様の御家來にて三百石取りの身柄のお方が  
 見る蔭もない炭屋の男と送ると云ふも親身の父子多助は嬉し泪に暮れながら山口屋まで送  
 られて飯りました是ら四谷の押原横町へ石と敷詰めて道普請と致しますお話して御座い  
 まそが其石の明治四五年の頃まで残つて居りまして只今でも彼の横町の堤溝の淵に石片や  
 何ふいふ積んで有まそが立着石の餘程厚いもので側面に山口善右衛門手代鹽原多助と彫  
 り附けて有りますると圓朝も鑑らに見ました正のお話でありますお細々しい所は面白味  
 薄う御座いまそから申上げませんが多助も山口屋方へ奉公中追々金と蓄り國の家と興たい  
 よいふ精神と買させうととるうち月日の経つのが早いもので十一年が其間奉公に陰陽な  
 く實に身と粉に碎いての働さ子に臥し直に起さ一すの間も油断せず身体と苦め身と惜まず

働さまする十一年目の丁度明和八年で其年の七月の盆の御案内の通りお商人衆は掛け廻り  
 杯でお忙しいので御座います段々月末に相成りますると大概用も片付きました多助は  
 今年三十一歳山口屋善右衛門の五十三歳と相成り主従親みの深い事他に勝れ善き心掛けの  
 人ばかり寄まするとの實は結構な事で 善「多助や、鳥渡此處へ來な 多「ヒエ、お呼ませ  
 いやしたか 善「家の内儀とも話しをして居るのだがお前もマア家へ來てから最う十一年に  
 なるが月日の経つのは早いものだろう 多「ハイ早いもんでがんすなア 善「お前へも十年の  
 年季の勤め禮奉公を三年勤めやうと云て骨を折て呉れるお蔭で身代の助けに成た事も毎度  
 あるんだが最う奉公も充分だからこゝらで國へ歸つて日頃望みの國の家を興てたら宜から  
 うと思ふそれにお前も隠くして居るから私も聞さもしあかつたが一體お前の國の何處だへ  
 多「ハイ誠には有り難うがんす只今まではお尋ねが有りましては國の家の事や私の身の上を  
 申やせんでした最う年季通り勤め上げお暇が出て國へ歸へるのも近いこんだからお隠し  
 申やせんが實は上州利根郡沼田下新田と云ふ所の百姓鹽原角右衛門の仲多助と申す者が  
 善「下新田と云ふのはそれは大分なんだア山の中の様子だらう 多「ハイ左様で



がんと私種を申すに申されやせん間違が有て國の家が潰れるよりやんしたる幸へのと  
 忍んで居やしたが母や女房が心得違への者で私とて殺さへいとまでに悪謀とされやした  
 ろら私も殺されては國の家と興てる譯にもいけねいら私し出れば潰れるとは思ひやした  
 が江戸へ参つて奉公とし金と蓄り國へ歸て家と興てやう命有ての物種を跡方は潰れても  
 れまでと思ひさきり國の家と出て江戸へ参りやしたが便るものはあく仕様がなくつて忘れ  
 しません十一月跡の八月二十日の晩に昌平橋のら身投げやうとそる所と旦那様に助けられ  
 御書家へ参り長い間御厚恩と戴きお蔭さまで炭の事やら書けもしねへ手も帳面位は附けら  
 れ筆盤も秋へて下さり實に旦那様の御高恩は海よりも深く山よりも高く死んでも多助は忘  
 れやせん 善「アイ」に其志が如何にも感心だのう 善「ほんとうに感心だねへたのら旦那  
 様が以時もお前と譽めてあの多助の志は別段だ」と云つて「アそれに出入のものを店のも  
 のまで惜な譽めて居るや妻や旦那様が譽めると外の奉公人は嫉みの有て悪く云ふものだれ  
 前ばらうは誇も悪く云はないのは全く平氣の心掛けが良いのだと旦那様と自慢してお話し  
 として居るんだよ 多「旦那様へお預け申たものはどの位にありやした 善「預けたものがアイ

日和平や鳥渡帳面と持て此處へ來なアイ」と帳面と受取り繰返し見ながら 善「多助の前  
 は給金をし奉公として呉れ拾た物と賣り預けた金に廻り利が増して百四十二兩と二貫文  
 となつたが大なものだのうそれならお前が國へ歸へるのに私も何んぞ骨折の禮としなくつ  
 ちやアならないが多分の事も出來あいが百兩やる積りだそれなら悴が十兩内儀さんが十兩  
 番頭が千疋店の者中で千疋車力儀のもの出方中獲らずで五兩其外荷主様に戴いた御祝儀煤  
 掃き或暮れ年玉何にやうや残らず帳面に付けてある處と番頭に寄せてもらつたら丁度三百  
 兩になるが微塵も積れば山だのう 多「大く蓄りやしたなアさうは蓄るめいと思ひやしたが  
 るれへもんでがんす 善「此金と以て國の家と興てきまうが附いたら今まで長い間心易くし  
 たものだらうら年に二度位づゝ江戸へ出て來る譯にはいくめいの 多「ハイ國の家と興てれば  
 二度でも三度でも旦那様の顔も見てへらら出て參やそが私家は國でも三百石の田地持で  
 山も澤山持て居りやんしたが母さまの心得違ひから山林田畠は人手に渡り家は焼けて仕舞  
 とねへのでまのら國へ歸へり家と建て田地と買ひ呉し馬の二頭も買ふには三百兩では足り  
 ねへやうでがんすられだけ蓄つた金ではあるしそれには國で稼いで百が錢と儲けるにも大



騒ぎだら最う些とべい此江戸で稼いで見たいと思ひやすがどうでかんせう 善「如何いふ  
 稼と仕て見る積りだのう 多「ハイ私別に覺へた商買もねへが長い間此家に御厄介になつ  
 て居りましたら炭の事は少しべい覺へやんした炭より外に何にも知りやせんら炭屋と  
 始めて見てへと思ひやんす就さやして私此間お使の歸りに本所相生町と通ると其所お城に  
 好い明店が有て間口が三間半奥行六間で小さい穴蔵が一つ有りやんして前の河岸附きに小  
 さい河岸納屋が有やすら炭の荷と掛るにも極都合の好い事ですれら直段と聞いて見た  
 ら二十五兩だと申やそが尤も邊建具残らずで籠はありやせんがうれば味で買ても好いが二  
 十兩位にぬんねきつて買ふと思ひやすがどうでかんせう 善「至極宜らう獨りでやつとや  
 れば又それ丈けの事有ませう炭は我の方から送るら仔細はるいが此金と資本にして創  
 めるが宜い 多「其金は貴所に悉皆預けて置私獨りで稼ぎ出しやそどうの此金と月々幾許  
 といふ細くも利と産み出そやう一つ御工夫なそつて下さいやし其内二十兩丈けお借り申て  
 家と買て創める積りて御座います 善「うれば宜いが二十兩で家と買て仕舞てはアア炭や何  
 にもと買ひ出すにいけまいがそれはどうする積りだナ 多「買ひ出さぬいでも炭はアア深山

有りやす 善「何處に有るのだ 多「ハイ積十年の團粉炭を拾ひ集め明き候へむやみに詰め込  
 んで拜借致しやした大い明き納屋へ深山打積で有りやすからあれで大概宜かんべいと思つ  
 て居りやす 善「拾ひ集めた炭じやア仕かたあるまい粉ばかりだらう 多「ハイ粉炭でかんす  
 善「其様な物を買人があるか 多「有りやんすとも貧乏人には豊後買は不自由な譯で中々豊後  
 は買へぬへもんでかんすから冬季などは困つて學九火鉢の中へ消炭杯を入れブウ〜と吹  
 いて震へながら一夜わかすものが多い世の中で裏店や何かで難儀して居て一俵買が出来ね  
 へで困つて居るものが有りやんすから其様な人に味噌澁に一杯高いか知りやせんが七文か  
 九文に買りやんせば太く益ななり買ふ人も寒さを凌げるから助かりやすゆゑ是を創めたら  
 貯度繁昌しべいと思ひやす 善「是は感心うまい考だ成程宜からう何か粉炭ばかり賣るも宜  
 しいが餘程貯つたかへ直ぐ賣り切れる様ではいかんがどうだ 多「ハイ勘定をしやした  
 ら七百二十俵べい貯りやした 善「ナニ七百二十俵だと優いものだなア 多「エ年にどんな  
 事をしても七十俵位は貯る勘定も成て居りやんすなア 善「フンそんなに粉が出るかのう  
 多「磨るものが斯して有れば賣れやすがあれで創めれば過分お借り申ても二十五兩でや



る積りで御座りやと 善創ろく 多うんら金をお貸しあすつて下さい家を買て来やす  
 うらと主人より二十兩の金子と借り受け直ぐに本所に参り彼の家と買ひ取り梅代と拂ひ近  
 邊へ店振舞と致し其所に住み込み粉炭の俵と前の納屋に運び入れこれら毎日彼の粉炭と  
 籠に入れ味噌澁と中に置き擔ぎ歩行さながら 多計り炭はようがんすのくく味増澁に  
 一杯五文と七文でがんと云ふので御座いますとがこの時分には計り炭と賣るものがないの  
 ら珍づらしくもあり一俵買ひの出来ぬ人々は便利事御座いますから一人買ひ二人買  
 ひ十人百人と好いことは忽ちに廣まり彼處此處で計り炭屋くと云ふ様に相成りました  
 それらら晝間賣り歩行き歸て参り夜分は又門口に大な高張と建て筆太ふ元祖計り炭原多  
 助と記し替の紋と附け店で計り炭と賣りまると裏店のおのみさん達が前掛の下に味噌澁と  
 うくし一杯お呉れといふので大層商ひが御座います八月の拾五夜から引續き十一月まで這  
 や繁昌致して居りましたとると其隣りに明き梅買ひの岩田屋久八と申し此人は年三十九歳  
 にある獨身もので稼ぎ人で御座いますと多助も稼ぎ人なれば互に睦しく毎日休む處が極て居  
 りまると夫れば四つ目の藤野屋左衛門と申して御駕籠御用達して名字帯刀御宿の分限で御

坐りまると其藤野屋の裏手の坂塀に差掛け被褥張と出で兼婆さんの店があります春は團子杯  
 と置き平常は鮎の足の茹玉子位と列へ玉子はない事が多いが鮎煎餅は自分で拵へますのら  
 何時もありまると其外駄菓子やお市微塵棒達摩狸の糞あそびで耳の遠いがお世辭の宜い婆さま  
 で御座いますと 婆「オヤれ早う御座いますとねへ何時でもお隣は有りして居ますヨやうも炭屋  
 さんと梅屋さんは毎日期限違入つしやると申してねへ頼に稼ぐお方は違たものでそれへ  
 今日はいつともよりお早やうですマア御茶と一つと差出と請取り 多「久八さんわもう来さう  
 あものだなア来たくく久八つわん今日は負けたんべしと思つたが矢張己が早つた 久「や  
 ア多助さんが今日ばよりは私が先さだと思つたのだが負けやした私は粗々らしいのら能く  
 物と忘れるのだヨ今日も梅と買た家へ手拭と忘れたものだら取りに返り遅く知たんだ  
 ヲ婆さんお茶一杯お呉れな 婆「れ天氣が能く積まませうぞ春にならなければお團子も賣れませんヨ 久「  
 ままヨ此鹽梅ではお天氣も積まませうぞ春にならなければお團子も賣れませんヨ 久「  
 雙だのらあんな事と云つてゐるお茶と一杯お呉れ 婆「ハイこれは氣が附きませんでしたと云  
 ひるがら汲んで出せと久八は請取り 久「多助さんいゝ商賣と始めたるア 多「マア仕合せな



事でお得意先が日々増へるばかりサ 久「好い事を考へた之れは別だよ譽める人もあり中には悪くいふ人もあるが何しろ者がうまへねへ 多「貴公も折角梅を買ってお歩行きなさい 久「たがねへ多助さんかうやつて刺衣又筒袖を着膝の抜けた半股引を穿き三尺帯に草鞋がけ天秤棒を擔いて歩行くのだが末には立派な旦那といはれる様にお互にならなひでは羨らない旨い物は喰はず面白ひものは観まかうやつて居るんだものをマア一生懸命に十年の間稼いだら滅法に金が貯まらうと思ふが多助さんは幾許貯める積りだね 多「私は金貯める積は有りません 久「そんならなんだつて稼ぐのだ 多「そりやア稼げば金が貯るが金を蓄る様な心じやア駄目だ私ア蓄らない様にする積だなんでも金蓄めて油断をしてはなりやせんコレ金能く聞け巴見る雪が降ても風が吹ても草鞋穿きに成つて寐る目も寝まに稼いで居るに汝はなんだ錢箱の中へ入つてし樂をしやうたつてさう旨くはいけねへ稼いで来〜〜と金の尻つペタを打つと痛いもんだからビヨコ〜出て往て稼いで歸り疲れたからどうぞ置ておくんささいと云ても已アかうやつて稼いで居るに汝そんな弱根性を出しては駄目だ稼いでさうといつて又尻ペタを打つと痛いから又ビヨコ〜飛出しては稼いで来る仕舞には

金が渡られて最う働けねいからとつり置てれくんささい最う何處へも往させせん貴所の傍は離れませんかと云ふのらそんなら置いて遣るべいと云ふこれが眞實に天然自然に貯る金と云ふものだアヨ 久「フ、ン始めて聞いた金の尻ペタと打叩くつてこれは妙だのうさうだが多助さん段々金が貯つて来ると使はなかつちやならない事が出来てくるせ交際で否でも應でも旨い物と喰る好い衣服と着なければならぬ様に成つてくるよ 多「私中々さうはさせねへな着物私が身に付ふとするととんでもねへ着物だと云て寄付す又旨い物だつて己口へ入らうとしてもそんな汚れた物は己が口へ入られねへと云て寄付けねへで打叩くのらさうすると喰物も段々に疲れて来てそんな事を云ひすにどうか少しべい喰てお呉んあせいといひ着る物も貴所の傍と離れねへらさうの着てくんると己身體へ附着いて離れねへといふのらそんなら着てやらう喰つてやらうと云ふのだこれは求めずして天より授ひる衣食と云ふ物よ 久「へい成程考へたねへ旨い考へたなアフ、ン 多「お前は明櫛買ひよ私は計炭やサお前は精出して明櫛と買ひ己は又なんでも擔はず精々と計炭と賣るこれの天地への奉公ヨ計炭やは計炭や明櫛買ひ明櫛買ひお侍は大變は大變且那樣は且那樣これは皆其人の



徳不徳にあるのだらなんでも辨はすられ丈けの縁きと精々と遣るがようがんと金と貯る  
 心と起してはいけねへなんでも貯ねへやう家には寄せ附けねへやうに儲のせ己貧乏だなん  
 といふ心と腹にして仕舞て唯無茶苦茶に天地へ奉公として居さへすれば天運で自然と金が  
 出来天がそれ丈けの樂とさせて呉れるのらなんでも邪心と起し一時に澤山儲けべいと思  
 て人の物と貪るやうな事としちやアいけねへ随分大い投機と工んでやれば金は出来べいの  
 其金はどうしても身に附いてはうねへ若し其身に附いても其子の代ふり急度消る譯のも  
 のて火事盗難といふ物が有るのらそんな大い身上ても續いて十度も火難に出逢ひ建る度に  
 瘡までも焼いたら堪るものじやならうだらうどうしても無理を貪ると又無理に出て往く  
 譯だのら無理のないやうに金に働かせ遊ばせねへやふにそののが肝必だ。久「成程多助さ  
 んろこへ考へが附のなかつたのらこうやつて醒睡幸ひのも厭わなくて稼ぐのは今に立派な  
 且那にならうと思ふのらだが能くなるのもわるくなるのも皆其人の徳不徳で明辨買は明辨  
 買のねへ。多「立派の且那樣にならないても正直にして天地の道に欠けねへ行ひとして居れ  
 ば誰にも愧る所はねへるらなんにも辨つた所はねへ。久「恐入たねへ成程尤へもんだこれら

は金の尻べと打散くとしやうヨ毎日此處へ休みながら前の云ふ話が始為めにあるよあ  
 の先達て鳥渡聞いたが神田の方ではと前の噂が高いヨ。多「ナニ譽められたつて油断は出来  
 ねへ悪く云はれやうが善く云はれ様か此方てさへ間違へとしなければ耻る所はねへるら安  
 心だ皆天地への奉公死ぬまで骨折てやりやせうと茶と喫ながら四方山の話しと致して居り  
 まそも自ら経済法が正しく儉約の道に適つて居りまする屋の久八も根が正直な人故肝に  
 銘じて感心と致し兩人て長話として居ます處へ年頃四十八九にもならうと思ふ女乞食が  
 俄の盲と見へて感がわるく細竹の枝と突き十歳ばかりの男の童に手と引れながらヨホく  
 して遣て参りホロくまた荒布のやうな衣服と襟肩は裂け袖は断切れおそろしいなりとし  
 て居りまそ小供は發賣張に並べてある大福餅と見附け腹が空たと見へ。久「お母アノ大福餅  
 と買てお呉んなエ。母「そんな事と云てもお前御錢が有りません何と大きいのとそりやア連  
 ても買やアしねへ爰お三文しのないのら三文丈けれ菓子と賣てね貰ひモシお願ひて御座い  
 まそが小僧がお腹がもきましてお店の大福と見て喰べたいと申まそが三文しの御座いませ  
 んかこれで一ッおまけなもつて買て下さいませんの。久「オィお婆さで小僧がお腹がへつた



ら大福と賣て呉れると云つてゐるせ負けてやんねへヨ 婆に好いお天氣て 久アレ仕様  
がねへなア包食の大福餅とまけてくれると云てるんだ錢が足りねへといふのらまけてやん  
なヨ 婆ハイナニ負けてくれる持ていさな負けてやるよア、忘やみに手と出してはいけ  
いサまけてやるのら焼過て堅くなつたのと持て往きな 母「有り難うぞんじますと云ひなの  
ら大福餅と請取り小供にやる小供はガツ／＼して喰べて居るのと多助は其母の姿と見て眼  
蓋致しましたが此を食母子は何者で御座いませうの次回までお預りに致しませう

説三來路二首婦偏儀傳

第十六回

察三前途一奇女切懸事

多助が彼の葎賣張て盲目の乞食と見て眼蓋しましたは十一年前沼田の下新田で別れた一旦  
自分の母親にありし實の叔母お龜にて沼田の家も此惡縁の爲めに潰れたので御坐いますの  
ら多助は心の内にア、叔母御も心がらとはいひながら盲目乞食とまでなりさがるとは皆な  
天罰と思えげも傍と見るとたる屋の久八が居まらうら聲も掛られず何の心に思案と定めま  
して 多八久八さん私少し用が有やとら誠にお氣の毒だがどうの一足先へ往ておくん





多助  
を捨て  
母を  
救ふ

塩原多助

おのめ

石太郎



せへ本真に跡から出舞やす。久「アそんなんも鬼へ狂まませうオヤ」／＼並の所は三軒ながら  
唄さ店も成つたか。ういふ日むたりのい、所が唄では困るねへと云ひながら荷を担き。久「明  
き店はござい」多「オイ久八さん唄だるじやまねへか。久「さうだつた粗忽かしいから仕  
方がねへ明だるはござい」／＼と流して往く後ろ影を見送て多助は右の欄ないお龜の手を取  
て。多「叔母さん此處へ掛けなヨ。母「ハハ何誰様で御座いますか有り難うぞんじます俄か言  
目で感が惡く御座いますして難儀します。多「マア此處へかけなヨ子供も掛けな叔母さん貴  
所はマアどうして此様で零落たヨ。龜「ハハ何様まで御座いますか。多「十一年跡沼田で別  
かれた貴所の甥の多助でがんすヨといはれてお龜の顔色かへ。龜「エ、多助どのか面目ない  
／＼と云ひながら思はず議らず様臺から下へ落ち大地に兩手を突てバラ／＼と涙  
を流しまするを見て。多「叔母さん面目ねへと云ふ事が分かりましたかへなまけねへ貴所も  
マア元は八百石取りの侍の家に生れお嬢さまとも云われた身が若い時分から心掛けが悪  
く若侍と不義をし家を驅出し縁有て子供が出来たが其男が死んだ後縁とい云ひながら己  
が八歳の時に賣われて往た養父猿角右衛門様の後妻となり假りにも一旦親子となる中に



父様が不圖江戸から連れて戻たの前の實の娘お榮を父様が血統の從兄弟全志の及夫婦よし  
 たら陸しいから此様な芽出度事はねへつて死ぬる臨終に枕元にお榮と婚禮の壽盃をしたに  
 貴所は死んだ父様の御遺言を忘れ四十に近い身を持ちながら原丹治と姦通をするのみなら  
 ず私といふ亭主のあるお榮を勤め丹治の伴丹三郎と密通をさせ實に畜生ども何とも云ひや  
 うのない行ひてはがんせ九かへの時に私がこれを荒立れば血を洗ふやうなもの詰り  
 業の恥よりやすから遠原の家名に疵を附けめへと思ひ堪らへて居ると二十歳にもなるも  
 のを小僧子の様も使ひまわしそれでも私蟲を堪らへて居りやんしたか仕舞ふ殺すべいとす  
 るから私家出をすれば其跡へ原丹治親子が乗込て来て遠原の家は潰れて仕舞ふのは知ては  
 居れど命さへあれば江戸で奉公をして金を貯め國へ歸て来て又家を建てる工夫もあるべいと  
 思ひ辛へのを忍び國を出る時に纏かよ六百の錢を持って来たが途中で悪漢に出逢ひ難行苦行  
 して漸く江戸へ着いた所が便る所もねへのて身投げて死なふかと思ふ所を助けられ其人の  
 家に十一年の間奉公をして漸々人となりやした只今では擔ぎ商ひと云ひながらどうやら  
 どうやら小い家を一軒持ち置を建てる身もありやしたからこれから積んで金を貯め國へ歸る

遠原の家と建てる積りでがんとが貴所はア其姿はなんだへとれら私い能く知らないが  
 貴の家は焼けて仕舞たつて貴所はアどういふ國で乞食になんすつたへ かり「ハイ」  
 一目次第も御坐せせんお前に又此處で逢ふのはな普天の罰で御坐いませお前が云ふ通り血  
 統の縁と私の子にして娘と妻せ何一つ不足のない身の上とあつたのに思案の外の淫逸とは  
 云ひながら年甲斐もなく原丹治と姦通と致しお前と度り出した跡で丹三郎とお榮の養子に  
 入れたのも名主と話合ひの上村方で誰個り非の打ち人のないやうにして婚禮とさせやうと  
 する處へ分家の太左衛門が聞附けて来て大變に立腹し掛合と始め大間連が出来丹三郎は若  
 衆の至りて立立のまゝ五入と切殺し太左衛門も斬て仕舞と云て追掛けて往と飼馬の馬小屋  
 へら飛出て丹三郎に噛み附され榮も丹三郎の様子と案じて其處へ往く所と馬が噛み附さ商  
 人とも馬に噛殺されお前の誓と馬が討たやうなもので今考れば天罰とは云ひながらし  
 いとだと思て居りますと太左衛門が逃げて觸れたと見へて村方の百姓が大勢集り私達を  
 打殺せ〜と騒ぎ立て、垣の周圍と取巻られた時は仕方がなぬら有金に小包にして身支  
 度としお榮と丹三郎の死骸と藁小屋に投げ込んで火と掛け漸々裏手のら落延びまして四萬



の山口村へ身を隠して居ると因果と懐疑いたしてねへ其翌年の九月産み落したの此處に居ます此四高太郎と云ふ倅であれば前とは敵全士の原丹治の子で御座いますそれより古郷忘し難しとは能く云たもので最う一度江戸と観たいと思ひお尋ね者の身の上だが丹治殿と私は生れ落ちてまた間のない乳兒と抱へて山口と立ち江戸とさして来る道の横堀村で又旅のお角婆に出逢ひ其家に泊たのが運の盡き道連れの小平といふ悪漢が丹治と斬り殺しました尤も丹治もれ角婆と全頼の仁助とを殺しましたら其隙に私は死物狂ひをうりして落延びやうと思ひましたが小平の爲めに吾妻川の深い所に墮落され既に私も此子も助りやうのない所へ北條村の百姓精左衛門と云ふ人が通りぬり助けて呉れました所縁有て其家にオムくベツツツと連れ子として後妻に成て居ますうちに清左衛門は三年臥しなりましたゆゑ其倅が桐生から飯茶した所私の心掛けが悪い所から遂に離縁となり此子と一所に追ひ出され振なく又四高の山口へ参り實は湯島の賄ひ女として居ますと一昨年からの暇病で去年の暮あたりからハツツツと見えなくなり成程深いものですゆり賄ひ屋じやありませぬゆゑ出て往けしと辱られましても泣き附いて居りましたが仕方がありませんゆり此

子と連れ居七月下旬の江戸へ出て来ます道々も色々お尋ねの事お尋ねも取らず野畑路へ廻り漸々の暮で江戸へ来ましたも或一したもね結核にた目に掛る事もあるやうと思ひ参りましたが一昨日の何にも喰はず私は厭ひませんが此子が如何にも不便で御座います私いながらで御座いせもが親の因果が子に報ひ何にも知らぬ此子が如何にも不便で御座います見る事も無い曲横妻でお前さんには逢ひ實に面目次第も無い事なす云ふ身の上になりますすの多助さん昔か前の罰私は今始めて気が附きました目が覚ました面目ないやうと堪忍しておくれなさい許してくれんなさいヨウ 多助か前々許して呉れ堪忍して呉れと云ふが神の理合と能く考へて見なせひ人と云ふものは思ふも物の長と云て此位な自由自在な働きとせるものはねへのた向ふへ往させんと思へば自然と向へ歩いて往られ寝たけりや讀になり喰いたけりや茶碗と箸と持て飯とかつてむ様に游へてあつて肩があるうら若口があるうら喰ふやうに其はつてゐる人の数だから只能く働いて天道に欠けず折てさへ居れば自然に喰ふられる様になつてゐるのだから喰へぬ入寄られぬといふ事はねへ言たがそこがそれ情慾に迷つて思ふ様欲しひま、に食ひ指いの可成りの嫉みだの癖みだの癖み指と



位ならぬ人と怨にして未ふは我ら我身と捨る様な事になり路頭に迷ふ人も世間には多  
 ことあるが假令一運悪い事としたつて改心する時直に善人だら貴所完く情が割だつた  
 情に済まないと思附いたらば助けて上げやせうだが死んだ親父の位牌に對してもすまねへ  
 ろら家の関と跨がとる事は出来ねへ義理だら裏の明店へ入れて置き喰ひもの丈けは日々  
 送て呉れべいられら此子が最う慈と譯が分る様になつたら己ア内に引取り眞の他人と思  
 ひ奉公に盡て算盤や手習位は情が仕込んで喰ひ方の附く様に工夫してやんべいが貴所情と  
 親だの前の体だのといふ心と出しては済まない。叔母とも甥とも思はず眞の他人と思て居  
 るければ國の亡父の位牌に對してすまねい。それじやア敵全士の此丹治の  
 子とお前は得心の上で目と掛けて育てゝおくんさるる様に有り難うぞんじますぞうと助  
 けておくんさるると兩手と合せ多助に向ひ神か佛のやうに只管拜みますと見て多  
 なに心配しなると何の様にもして通るらと多助は茶代と辨ひ彼の被い見る影もない  
 親の手と奥て奥の荷と擔いで販へりましたが霜月の事で御座いますら人通りも減太には  
 有りませんら親も知るものは有りませんと先程より裏の屋左衛門の娘を花と申で

今年二十一歳に相成り近邊で評判な別品の娘でとが不思議な女で御用達の事難儀で有りな  
 から絹布と着た事は有りません尤も外へ出まされ時には御雨親のお恥になるともまないと  
 申して着ますが宅に居る時はどうの綿服にして下さいと申し頭も飾らず白粉は更につけ  
 ずまことに清潔とした娘で御座いますとが自づと氣象が氣高くてる威嚴は有りません心掛け  
 の良い娘で御座いますと多助が日々裏の茶見世へ来て話をするのと聞て感心致して居ました  
 ところへ今日はお龜といふ叔母の参りましたのと多助が段々と意見と加へ敵全志の親子と  
 は助けて遣ふと云ふ志は誠に感心な事だと年はまだ二十一歳で御座いますとが心ある娘で  
 多助の往く後影としみじみ眺め見惚れて居ますと廣間の傍に土蔵と深く取た六疊の小室が  
 御座います其處に藤の屋左衛門が居まして。花や〜何と視て居るのうと云われてか  
 花は心附き。花「れ父さまの毎日おとこの被費張に炭屋さんが休んで居ますねへ。彼は  
 中々感心な男だ只の人間じやない計り炭と賣るなどとも工夫の旨いそれに云ふ事が皆  
 な異つて居る。花「毎日明きたると買ふ人と話として居升がせうも不思議な事と申すわ  
 のれ方は今に立派の御方に参りますねへ。花「尋常者じやないのう。花「お父様家へもいくら



お人が来まるとの眞實にこの炭屋さんの様なれ方は有ませんねへ今日といふ今日つくと  
 この炭屋さんに表は惚れと云ひはけ親父の顔で覗て恥うしうに下と備さ眞赤に成りまし  
 た。李「何の彼の炭屋に花は惚れたらウッ惚れても好い儘く惚れた己れも惚れて居る感心だ  
 この種々の半股引鞆子の筒袖で眞黒けへに成て居るのだらう色香に惚れたのではない炭屋  
 の心に惚れたのだらうと李左衛門も鼻が高い流石は藤の屋の娘だ宜しい貴様が強つてあの  
 炭屋の所へ嫁に往き度と云ふなら遣てやらう。花「お父様眞實で御座います。李「住きた  
 いる。花「眞實におんな人はないと思ひます彼處へ嫁に遣て下さいませればおんるにも親父  
 様に孝行致します。李「サ、感心だ罷く云たとうも平常乙る理屈と云ふ丈けお前の心成が  
 宜しいが併しあの炭屋の何處のものだの家が分らないで困るが明きたる買ひと惡意な様子  
 だらう彼奴と叫んで聞いて見たら分らうが然るべき縁約と頼み娘と貰つて下さいと云たら  
 急度炭屋は御用達の鳩は嫌ひだ位には随分云ひ兼ねへ男だうも兎も角も明日明きたる買ひ  
 が来たら呼んで呉れ相談として見やふよ。李「よしや明日ノウの相々つうしい明だる  
 買ひが来たら少し用ゐるのら呼んで呉れ門の方から入れずに裏口の外庭の方から入れて呉

れるい。下「取りましたと其日は暮れ翌日に相成りますと時間違はず例の通り。久「明き  
 たるはござい〜と流して参りました。下「サオイト明たるやさん。久「〜〜〜。那處様で御座  
 います。下「アノ且那様があるたの鳥渡は目ばかりのりたうらと仰います。下「〜〜〜。庭の開  
 きのら入て下さいまし。久「何様様で藤の屋様では誠お有り難いこと成丈けお直段と  
 能く頂戴致します。そのら外へお拂ひにならず私が頂戴致し度御座います。下「たるはかいくつ  
 御座います。下「且那様の少し御相談申度いどが有ます。そのらと云ひながらギーツと開き戸  
 と明け。下「此方へ御入なんさいよ。久「ア御座います。か〜〜〜。中へ入りますと庭の清潔な事  
 赤松の一と抱へもあるのがあり其下に白川御影の春日燈籠のあり梅の木植込み錦木のあ  
 しらひ下草の様子何やのや申分なく鞍馬と御影の飛石に敷松葉のら霜除けの飾打水と致  
 し洗ひ上てありま。土庇の深くなつて居る六疊の茶の間が有まして其處に李左衛門が坐つ  
 て居りまして。李「サア樽屋さんズツ。此方へ来て呉れ搦わす開けて此方へ入りよしや  
 入てあげな。久「〜〜〜。只今草鞋と脱て参ります石が筒様に洗つて御座います。そのら。李「  
 イヤ搦はず遠慮としてはい。おんア、松葉の中へ踏み込んではいけない。其天和棒は片付け



ておくれア、石燈籠へ建掛けて、困る能くお出でつた。久「お初にお目にかゝります私、岩田屋久八と申すたる買ひで御座い升が何分御最負を願ひます。李「マアこれへ腰をかけておくれ石の上へ手を附て、困るよ。久「誠に立派な御住居で御座います斯ういふお廣いお宅は初めて拜見致しましたあのへこんで居ます處のなんと申す。李「あれかへあれの床の間だアね。久「へい私はへこんで居ますから凹の間かと思ひましたお坐敷か大層續いて御座いますなア彼處の方に小いお坐敷が有ますがあれいなんで御座います。李「あれは便所だヨ。久「へい誠に結構なお住居で御座います。李「花やお茶をあげなヨ。花「ハイと耻かしさうよお茶を汲んで久八の前へ置く。久「へい、是の有難う存ます、と云ひながら茶碗を手に取揚げて祝するに古染付の結構なたつぷりした煎茶茶碗を象眼入の茶臺に載せて出しますから。久「へい、恐入ます惜しい事に周圍がボツ、兀げて居ますナ些とお茶がお冷暖様で御座います。李「イヤ餘り熱いと苦くて飲みにくいからだヨ。久「へい戴きます大層甘う御座いますお砂糖でも入て居ますかナ。李「お菓子を上げなよ。花「ハイと云ひながら露麥饅頭時雨饅頭などを紙の上へ山盛に致し久八の前に差出だす。久「こんなよの戴けま

せん。李「皆喰なくつても宜しい餘たら持て歸て小供におあげな。久「これは恐入りました御大家様は違たもので御座いますとナ一寸御菓子にも饅頭と三十も四十も積上げて御出しなされる大きなもので御座いますと矢張其人に備る徳不徳で私るぞは精出して明と梅と買て歩行くので御座いますな有り難うぞんじまそ時に梅はれいくつ御座いますとナ。李「梅と買るのはやない少し相談したい事が有ますのだ久八さん誠に耻入た事でもが藤の屋空左衛門折入て此通り手と附て願ひ度事があるのだがどうぞ聞濟みと願ひたいとこれらら縁談の事と申入れるといふお話しでございませどが一思ひまして直に申上ります。

第十七回  
企圖不達異奇遇  
意氣相投是良縁

多助が身代と仕出しますには女房が悪くつては逆も身代と大きくする事と出来ません多助の女房になりまそのは前回に申上ました通り用達し藤野屋空左衛門の娘お花で實に別嬪で御座います女は容貌形ばり美つても心掛が悪くつては何にもなりません此花さんには海も山も備つた實に何とも云へない佳い娘で此は用達しの娘が計り炭屋へ嫁に行く



と云ふは實に妙なるもので縁と云ふものは不思議な譯で南分大坂のものも東京ものと夫婦になり東京のものと長崎のものと夫婦になり只今では歐羅巴の人と日本の人と教會で葡萄酒と呑んで婚禮とすると云ふ世の中になりましたが縁は妙なるもので御座います之れと障子に譬へて見ますと障子も遣ふ木は何國の山の木が知りませんが美濃で製した紙と張て障子になります骨ばりでも紙ばりでも障子になりません此二つが持合て一つのものになりますのら心掛の悪い女房と持ても悪い亭主と持ても捨てる事は出来ません圓朝の機織りない衣服は南部で出来た表に青梅飯能邊で出来た裏と附けまると一對の夫婦で表は亭主裏は女房でそのら折目正しく整然として居れば一對の夫婦で御座るまことがそれと亭主の方で浮氣の染とつけたり女房の方で嫉妬の焼け穴でも拵へたり何の事と之れと離して外の裏と合せるると再縁にあるやうのもので合せるものは離れもので御座るまことが折目正しくして居れば整然として二世も三世も夫婦に成て居りまると夫婦は三世と云ふ縁合のものですのら少しの嫉妬位で私へ出て往くのら一本お書きなんて全体女が男に一本拵けなんと云ふののれのしるわけで御座います其時御亭主が病癪が起つて居りまると直ぐお三

行半と渡して出されますと合せるものは離れもので再び飯へる事は出来ないので嫉妬の起つた所は嫉妬腹と立つてはいけません嫉妬は疑り疑りは嫉妬の玉子です女房が旦那は何處のへ女の何の出来やしないのと思ふとこれが嫉妬の玉子ですと亭主の事な事さう見へます旦那が少し春氣で頭髮が痒いのら床屋と呼びにやつて呉れと云ふとハナナまだいつもより少し刈込みがお早いおそれには何處へのお出なさるのだらうこれに此間香水の良のと二本買つてお出でなすつたのは變だなと胸がムカ／＼と妬氣が起つてさうすると聲の出かたが違ひます 女「お召し物は何か宜しう御座いますか」亭主「そんなに良のはいりません結城紬の着物に絹中の羽織で宜しいと云ふといつもはお召し物の召物だが今日は誰いおなりとして見せやうと思つてと又モヤ／＼として 女「車と云ひ附けませうの」亭主「車は外で乗りませうのら宜しいよといふとハナア家へ知れないやうに外でね乗りなさるなと思ひ又たモヤ／＼としまして極れ毒で御座います其嫉妬の起つた時結構な一首の歌がありますのらお教へ申さそ」雲隠れの後間の山の淺ましや人の心と見てころ止まり」といふ歌ですがモヤ／＼と火の燃へるやうで縁に渡ましい丁節と亭主が浮氣としたのどうだの飽く見て妬氣と起



せばいゝにそこで人の心を見てこそ止まめといふので浮坐いますそれですから妬氣の起つてモヤ／＼とした時に「雲晴れぬ」さういひけませんがお氣を注げぬをせ扱て多助の話を話して浮坐いますがお花の多助の志を見抜いて嫁に往きたいといふのですから浮氣のやうで浮氣でない親父もお花が多助の所に嫁に行きたいといふのを聞いて心嬉しいから 李扱て樽屋さん 久「誠に有り難い事で樽の幾個浮坐います 李「樽でないお前さんと毎日一所に家の側の霞張に休んで話しをして居る炭屋さんの何處の人ですエ 久「彼の私の隣家で 李「お前さんの家を知らない 久「本所相生町で浮坐います 李「アノ炭屋さんのお神さんがありますか 久「エ、彼の人の八月の十五夜に店を開いたばかりでまだお神さん所でのありません 李「ヘイ何處の人だエ 久「上州沼田の人だと申しますが誠に面白い人で座います 李「左様かへ彼の炭屋さんに女房を一人世話をしてお貰ひ申たいが強て往きたいと云ふ人があるんだから女房に持て呉れやうか子 久「ヘイそれのお宅の御膳炊ですか彼の人の男振の宜しう座いますか何しろ眞黒に成て働きますから紺屋なら眞青だが炭屋だから眞黒でござうも 李「誠に恥かしいがこれに居るの私の娘で年の廿一に成て墓に立て誠に良縁があり

ませぬが彼の炭屋さんを見て嫁に往きたいと云ひ私も遣りたいと思ふがお前さん媒約に成て貰ひたいものだ 久「何誰様をエ 李「これに居る娘で 久「ヘイ／＼／＼此お嬢様アハハ、御申談のかり云て御大家様杯はお隙でお退屈でいらつしやるものだから樽買を呼んで遊ばふと云ふ御申談で御坐いませう 李「詐りでのありません藤野屋空左衛門の帯刀御免であります此通り手をついてお願ひ申す 久「そんなら眞實で御坐いますかアノ間違ひではありませんか計り炭屋で御坐いますか 李「左様 久「何處がお見込でお嬢様は嫁に入つしやいますな 李「姿形ちに惚れたのではない唯た一ツ娘の見込があります只た一ツ臍から二寸ばかり下見所があるのサ 久「ヘイお嬢様は何處のお湯に入つしやいます 李「アアに心にサ 久「ハ、ア成程心の二寸ばかり下ですなお嬢様眞實で御座いますかと云はれ洗石は處女氣に眞赤なりました 久「彼の感心で御座います佐久間町の山口屋善右衛門の所へ奉公をして白鼠と云はれる位で彼れは變つて居りますそれをお嬢様が見抜いて嫁に入つしやる貴所が遣りたいと仰しやる彼の人も仕合せですな宜しう座います 李「恥度お世話致しませう 李「眞實かへ 久「どんな事がありましたとも恥度お世話をします 李「ア、そんなな煙管で青



磁の火入と敵いては種がついぢいけないうろして其煙管は私のじやあいの 久「これは旦那様のお煙管でとんだ粗忽としました 幸「オイ何處へ驅出して行くんだ 久「ア、又間違ひた煙管の吸口と洗はうと思つて私の口と洗つた 幸「何の事だ 久「宜しい屹度お世話申まを空「ア、未だ用があるヨオイ、其地へ行ちやアいけないうア、垣根と隣いで出て行つて仕舞た粗忽のしくつて仕様がぬい夫より久入は急いで多助の宅へ参りまして 久「多助さん、どうした 多「もう飯つて來さうなものだと思つて待て居たア、草鞋と穿いたなりて家へ上つちやアいけないうぢやないの 久「多助さん慌てなさんる 多「お前が慌てゝ居るんだヨ 久「多助さんお前の云ふ通り運は天から授けられた前知つて居たらう藤野屋空左衛門さん 多「ウ、ン藤野屋知つてるヨ 久「どうも頭髪がこんろでどうも 多「藤野屋の頭髪が 久「ア、アにお嬢様が廿年が廿一で美女だねへるれがお前の所へ嫁に往きたい遣りたいと云て藤野屋の旦那が縁側へ手をついてお前さんに媒妁と頼むといつてどうも美女だお前に見せたいヨア、云ふ大家の嫁が來るつてお前はもうも仕合せだどうも大きな家だヨ座舖が舞間もくく、あつて庭も大變立派だヨ其のわりに掃除が届かないチ松葉が一杯にこぼ

れて居るヨ而うして長菓子とア、忘れて來た惜しい事としたうれて茶を入れてぬるいのがひの、だつて甘い長茶でどうも、お嬢様お前が實ひようく、多「お前の云ふ事はなんだの些ども聲が分らない 久「誰じやないお實ひなさい 多「藤野屋の娘は己見た事はあるが美女た全くさう云ふもの 久「全くつて藤野屋の旦那が手をついて頼みお嬢様の眞赤お成たヨ眞實だヨ 多「お前は今年の十五夜から交際して居て口と心と違つた事はねへうら正直な人がと思つて居たがお前遊びじやアねいなア 久「遊びじやアねへお前より此方の遊ばれると思つて居たら眞實だつた 多「眞實に藤野屋空左衛門が獨り娘と己お呉れると云へば藤野屋は横着な奴だなア 久「あんで横着だ 多「己が働かして見抜いて彼奴が嫁によさうと云ふのはどうも油断がなんねへ駄目だらうら斷つてくんねへ 久「ナニ斷る多助さんお前勿体ねへ事と云はねへもんだ彼れと賞へば長持が幾掉田地が幾許來るの知れねへこれが眞實の夫から授けつて來た寶じやアねへる 多「駄目だねへ私ア計り炭先方は御用達しで金はあんべいが幾許有ても使へばなくなつて仕舞已ア稼ぎじやア夫婦銀稼ぎでみければなんねへに先方はお嬢様たら飯は焚けねへし味附漉と提げて買物にも往られめへ己ア家へ來ても女



中でも一所に附て来て朝寐としてお引ずりで銀の股引と穿いた着とチャツ／＼云はして飯と食つて居ちやア飯が食へねへさうすると幾許有ても直ぐに金がなくなつて仕舞ふ身代の爲めにならねへ釣合ぬは不縁の元だのられ断り申す往つて断つて来てくんねへ。久「フウン成程お飯の炊ねへ已ア一途に宜と思つて此度世話とすると云たのれ断るのは聞が悪ねへ多「間が悪くつても断つてくんねへ。久「ア、／＼鼻の先に垂下て居る寶玉と取ねへの残念だなア仕方がねへ往て断つて来やうと云ながら久入は藤野屋へ参り久「ハイ参ました。今度は表のら來る。久「先刻戴たお菓子持て参ります。李「炭屋さんに話してました。久「ハイ話しましたがどうも。李「迂闊返事としまささいねへ後用達の娘と炭屋とは釣合はるい釣合わぬは不縁の元位の事は云ひましたらう。久「貴所立聞としましたらう。李「あるに立聞はしませんの彼の人だのら其位の事は云ひましたらう。久「其通り云ひました。日夫婦俱様さとするのだらう金は使へばなくなるお嬢様だらうお飯はたけず味増進と提げて買物にも行けねへおひきりでは身上の爲めにあらねへら断り申すと云ひました。李「成程至極尤もだが何う云ふ人の娘なら嫁に貰ふだらう。久「計り炭屋でも坐いますのら明輪買ひの娘でも

あつたら貰ひませう。李「お飯と炊くのは習わせなうつたが絹布い物と着るのは嫌いで針仕事も幾へ髪も自分で結ひませその飯と炊く事は知りませんが宜い久入さん前さんに娘と遣りませうお前さんの家に一年でも半年でも置てお飯も焚うせ徳利と提げて買物に往られるやうにして多助さんの所へ嫁にやつてくたさい。久「アノ私しの娘に眞實で御座いますその李「嘘は吐かない。久「宜しいこれで多助さんが貰はると云へば喧嘩としまさ忘れないうでお菓子と戴いて参りませ左様なら又歸つて多助に藤野屋の申た事と話しまさ多助は首と傾けて想はずハッと膝と敲きまして。多「成程面白い明輪買へ彼れ程の大家の娘と呉れて計り炭屋の嫁に遣りたいと云ふら貰つても宜しいれ前の娘なら貰はふが私一存で定める事は出來ない主人に相談して主人が持てもいふと云へば貰わふのら暫く待てお呉んなせへ。久「うんなら早く往て相談して来るがいとこれのら多助が参りませそので御座まさが中々元には歩行させせん炭荷と擔いで計り炭は宜しう／＼と商なひとして儲けなうらまいりませと山口屋の納屋の所へ荷と下しまして店の方から入り。多「番頭さん御無沙汰としました。和「イヤ暫く分なぬがどうしたへ旦那様も案じて入つしやる色々風聞も聞たが大分繁昌



ださうで誠まことに結構けつこうだね、多おほ、直ぐに且那様ぢなさまにれ目に掛りお話し申てへ事があつて参り  
 やした、多おほさうのい盛所さかきの方へお回りといひますらう多助たすけは草鞋わらじと脱はきで上ります番頭ばんとうは多  
 介たけの参りました事と主人しゆじんに知らせまふと主人も大きに喜んで、主ま誠まことに能く来た私も逢あひたい  
 と思つて居たが尋ねもしず獨りひとで嘸まど忙いそうしうらうと思つて案あんじて居た、多おほ誠まことには無沙汰  
 と致いたしました責めて一日置いちにちきにもお見舞みまひに出てへと思つて居りやしたが見世みやよと出して夜も  
 商あきなひとしやすうら忙いそしくつてツイ無沙汰むさたとしました、主ま却かへつて無沙汰むさたの方が宜よろしい誠まことに能  
 く来た何なにの用もちがあつて何なにの話はなしたい事があるさうだがなんだへオイれ前まへ多介たけが来ましたヨ  
 女房にようばう「能よお出でだねへ此こゝろ間ま芳よしに尋ねてやれと云たけれども尋りもしず鹽梅しほばいでも悪い時には御  
 りものだら藥くすりと煎せんじろものもなくつて困こまるだらうと思つて居たが大層おほい繁昌はんじやうたさうで陰かげな  
 がら喜んで居ますよ、多おほ誠まことに出来るもこれも皆みな且那様ぢなさまのお蔭かげで誠まことに繁昌はんじやうして此節このときは炭粉すすも無  
 くなりましたのら且那様ぢなさまの炭すすを買かつて打う撃げして賣うらうと思つてはうして私もこれら移うついで  
 金かねと貯たくわめて國くにへ販はんつて家いへと建てたいと思つて居るよ、主まそれば誠まことに結構けつこうな事で、多おほ誠まことは  
 して私嫁わがよめと一人貰もらへと云て人が世話せわとしやとが一人口ひとくちは食くへね、二人口ふたりくちは食くへるといふ

買かへるもめりやすから且那様ぢなさまがまだ早はやいとさへは待まちたすに居やすし賣うつてはさういふは  
 買かはうと思おもはれて且那様ぢなさまに相談さうだんに参まりした、主ま世話せわをする人かあれは買からうがね、上うへ様さま介けい口  
 と云いふものは甘い事ことを云いふものだから能く先方さきかたを聞きかして買かふが宜よろしい再また縁ゆかりでもする女おんなか  
 多おほ「且那様ぢなさま云いふ譯わけで御座ご座いますとこれから明梅あきばい買かひの世話せわで親元おやもとはこれくと申まをして明梅  
 買かひの娘むすめにして買かはふと云いふ事を話はなすと山口屋やまぐちや善右衛門ぜんゑもんは案外あなごころの咄はなしに實まことに感心かんしんしまし  
 て、主ま「多介たけそれといふのもれ前の心掛こころかけにある神佛かみぶつのね思おもひにあるからこれを買かはないと云  
 お譯わけはなす買かひ、多おほ「ハイ、ハイ、ハイ、女房にようばう「誠まことに思おもひ掛かけない咄はなしじやないわ其親そのおやが遣つから  
 うといふのも感心かんしんだが娘むすめがれ前にサれ前まへだつて男おとこはわるくはないか擔かき商あひをするのを見  
 抜ぬいて來きたいと云いふ其子そのこも感心かんしんではありませんかね、且那ぢな、主ま「誠まことに結構けつこうだね、嫁よめのし  
 せう、多おほ「それはいけません藤野屋ふじのやから來きるなら山口屋やまぐちやの且那様ぢなさまの媒まがいが宜よろしいが明梅あきばい  
 の岩田屋いわだや久八くはちの娘むすめにするのだから山口屋やまぐちやの且那ぢなとやアいけません少し過ぎますが番頭ばんとうさん  
 が案あんを持もつて夫婦夫婦一對いっぴ揃そろつて居ると云いふから和季わきさんにね頼たのみ申まをさせう、主ま「宜よろしいそんなら  
 和季わきに云いひ附つける、婚よめ禮れいは何なに日ひだね、多おほ「先方さきかたはなんといふか知しらね、が十二月じふにがつの十五日じふごで



定めました 主「それの如何云ふ譯で 多「日の吉か悪いか知らねへが我が國を出たのが八月十五日で店を出したのも十五日だから大切の日を忘れねへ爲め十五日にしませう 主「左様サ三日だから至極宜しからうそれが隣家から直ぐ来るのの變だらうから何處へか廻つて来るかへ 多「なアに直ぐに来やす 主「何處か高張でも出す所があるだらう 多「婚禮のどうか晝の午の刻に願へてい 主「それの可笑しいお大名の婚禮なら午の刻だが計り戻屋の婚禮に晝の可笑い夜がいよくく 多「どうかそれだけの晝にして下せへ夜の出来ねへ 主「何故夜の出来ない 多「それでも夜すると商ひが出来ねへ 主「商賣の一日位休んでもいしじやアないか 多「その私アかまわねへが方々の神さん達が待つて居るから朝の商賣に出なければなんねへ又夜の家で商ひをするから遠くから神さんが前掛けの下へ味噌漬を入れて買ひに来るのに今日の家が婚禮だからと云つて斷ると冗足をするべむじやねへ炭がなければ此寒ののに木片を焚いてブウ〜云つてあたる位で大勢の人に寒の思ひをさせなければなんねへから朝商ひをして夜商ひをしてそれから寝せへすればよかんべい 主「とりやア寝るのの宜が成程人の難儀になるのだから其方が宜からうそれじやア上下を着るかね 多「ど

うして〜 主「先方が藤野屋左衛門だから婿も上下位は着なくつちやアなるまい 多「なアに私ア此の筒袖で宜うがんと 主「どうの身の出世だらう袴羽織でやつて呉れとこれらら和平と呼んで話しませと和平も大きに悦んで承知しました 多「且那様どうの鳥渡着物と羽織と貸しておくんませへ 主「何處へ往くんた 多「これらら往つて来る處があるから 主「なんな着物がいな 多「るアに鳥渡したので宜うがんと 主「これ俵のと貸してやれ結城袖のが宜しいとこれらら着まして多助が戸田様の御屋敷へ参り實父鹽原角右衛門に會ひ婚禮の事と相談と致しませといふ話して御座いますが一す一息つぎまして申上ませう

第十八回

親子重義志意堅  
 夫婦守家益富

多助は主人山口屋善右衛門のら若物と羽織と借り之れと着まして戸田様の屋敷に居る實父鹽原角右衛門の所へ往きました丁度十ヶ年ふりて御坐います尤も五年前危難の節實父には逢ひましたが匆卒に別れましたゆゑ今日は染々物語りとしやうと思ひまして屋敷へ参り多「ね願ひ申す〜 男「ドレ〜 多「手前は山口屋善右衛門方の手代多助と申します



旦那様へ御目通りを願ひます 男「左様か少々扣へて居れ 男「エ、山口や善右衛門方の手代  
多助と申ものが参りました且那樣へ御目通りを致したいと申す 角「ナニ多助が参つたど  
如何云ふ姿で参つた又筒袖を着て参つたか 男「イ、エ羽織を着て参りました 清「妾もあれ  
ざり逢ひませんからどうか貴郎お義理堅いのも程がありますからお逢ひ下さいませ 角「多  
助をこれへ通せ 男「ハイと云ひながら玄關へ参り 男「此方へ通らつしやい 多「ハイと云つ  
て座敷へ通りましたが母の顔は十年ぶり父の顔も五年前に見たが眞の顔で見たのですうら  
詔く分りません多助の實は慈うしく胸が寒がつて 多「御機嫌宜しうと云ふなりにヒツタリ  
塵へ頭を摺付けて居ります 角「誠に久敷逢ひません人の噂は山口屋善右衛門方の奉公を勤  
め上げて何う本所邊へ店を出して大分繁昌の様子も聞いて居つたが何う用事があつて参つ  
たどり用向を申せ互に無事で居て芽度 多「私もお目に掛りてへと思つて居ても奉公の中は  
只お屋敷で浮兩親様のお建者で入つしやると云ふ事を影ながら聞きますばかり私も望みが  
叶ひまして山口やを首尾能く十一年勤め上げ相生町へ店を出し繁昌して忙がしいので間合  
も亦く夫故お屋敷へも出ませんでしたでしたが今日は御機嫌伺いながら参りまして 清「實に旦那







標もお年とどるし最う尋ねて来さうなものだと思つて居ても旦那様は義理がお堅いから沼田の養父に濟まんと仰しやつて来進ひなさらなうつたが今日は立派になつて来て誠に嬉しい事で多「私も嬉しう御座へまそ親さまして國へ歸らうと思つて居ましたか山口屋に預けた金が三百兩ばかりで國に歸つて家と興てべいとは存ましたら江戸で稼いでもう七八百兩貯めてのら歸るべいと思ひやして店出しとしたりした所が有り難へ事に繁昌します私もまだ三十一だのら今十年も嫁げは國の家も大く興てられ親族の家も興てべいと思つて居りやした所が女房と世話とそる人があつて主人も得心で御座へまそが持ても宜しいる宜しくねへる伺ひに参りやした角「誠に手前が堅くして居る所らさう云ふ譯にあるので誠に恐説の事は何う云ふ者の娘じや山口屋善右衛門が得心で持たせると云ふ女房なら宜しいるれば結構だ「最うこんな立派に成つて来ましても矢張幼穉心持りで居りますが女房と持つやうになつて誠に結構だねへ先方は何う云ふもので女房の身分は多「身分はこれくと前申上ました藤の屋の事ら明徳買の娘にして賣ふ事と細うに申すと聞て角右衛門は學問のある人だけに暫く考へて角「多介誠に得難い幸ひだ實へく向ふも藤野屋左衛門の娘



令へ樽屋からよこしても婚禮の時の世間へ對して振袖位の着せてよこすだらうナ 清「そりやア貴郎假令戻屋でも婚禮の席の立派にしなればなりませんから嫁も地赤に緋ひ模様振袖に白の掛位の着なければなりません多介も世が世なら上下位の附なければなりません角「運悪くア、云ふ事になつたからどうか貴郎浮紋付きを遣て下さいまし」角「さうさ上下も入るなら遣るから持つて往くがい」多「主人から紋付きの着物と羽織と袴を祝つて呉れましたからいりません」角「何を出せ袴と盛影を出せと備前盛影の一刀を出させまして」角「これの手前の身の固めの祝ひとしてやる又此五十金も遣す」多「實に有り難い事でお身に就きましたものを戴きますのの願に有り難う坐いますがお腰の物の戻屋に入りませんから頂戴致しません」角「左様で無い町人でも脇差の腰位になければならぬものだからこれの祖父様からの譲りものだから取て置け」多「ハイそれでの戴さやすが此五十兩の戴さません」角「マカ能く考へて見る沼田の鹽原角右衛門殿の同姓の交誼で手前を腰の上から取上げて育て八歳に成て返へす時禮として五十金を贈られ拙者の其五十金を持て身姿を盛へ江戸へ出て只今斯うやつて三百五十石頂戴致すやうになつたのの角右衛門殿の恩儀其時受けた金

と只今返金に及ぶのだから此金と以て沼田の家と買足しにすれば已れの氣も済むのらあれば強て受取れ」多「御尤もで御座いますのら此金と以て養父の法事を致し餘りで馬でも買ひませやうにさせう」角「婚禮は幾日だナ」多「ニ、來月十五日で御座います」角「夕景のら行て模様と見たいナ」多「婚禮は正午の刻に極めました」角「ハチチ何う云ふ譯で」多「これには深い譯があります」角「左様の立派にやれ」清「ア、是の差ふるした柄、并音物ゆる氣には入るまいけれど嫁御へ私が心斗の祝物常に此柄と并とさして舅姑が側に居ると心得油断なく家と思ひ夫と大切に致やう私グ申たと云て遣はしておくれ」多「ハ、有り難く戴きます左様なら御機嫌宜しうと暇乞ひとしますと両親が支關まで送つて來まして嬉し涙とこぼしますと見て」多「左様なら時節があれば又お目に掛りますと云ひつゝ別れとつけ歸つて來まして早速久八と以て藤野屋へ挨拶と致しますと藤野屋のお娘様これら十五日まで樽屋久八の家で御膳焚きの稽古と致して居ましたが扱て十二月十五日となりますと女親の妙なもので假令樽屋へ遣つても嫁に往く時の品とて拵へて置いた縫模様の振袖は多助に話して當日だけは着せて遣りたいと云ふ多助は袴羽織でお花は縫模様の振袖と大和



錦の帯と縊り髪は文金の高髻にフキ／＼と結びまして少し白粉も濃く粧けまして和平夫婦が三々九度の蓋と手に取上る折から表の方より半合羽と附て今河岸の船より上つて来たと言ふ様子で入つて参りましたのは炭の荷主で飛駒村の吉田八右衛門で御座います。八「ハイ御免なさい誠に不沙汰しやした和平さんも此方だね。和「これはどうもお珍らしい當家も芽度事がありまして参つて居ます。八「店出しとすると云ふ事と聞たうら炭荷を送らなければ多助さんに虚をついたやふだうらどうの送りてへと思つて居たが中々千兩の炭が集まらねへのと漸々集りて十三艘の船へ積んで河岸へ持て来たう川が狭へうら棧橋が邪魔に成て仕様がねへ。多「ハアどうも有り難うがんと私が家は今日婚禮でがんとすうらマッ上つて俱に一盃もがつておくんなせへ。八「婚禮處じやねへ炭と揚げなくつちやア他の舟の邪魔に成つて仕様がねへ炭と揚てうら婚禮と仕なせへと云ふうら多助は紋付さの着物の片肌抜きて母と端折つて向ふ鉢巻と致しまして精々と炭と揚ぎ始めましたさうすると縁も。花「私の振袖と結んで下さい。和「何とするんだ。花「何んでも宜しいと云ふうら結んでやりませすと子供が水懸とすうやうな姿としてお花は雨襦と高くはしより跣足で河岸へ出て往きまして。花「旦那







様れ一人で忙がしう御坐いませうのら妾が擔させうのら輕さうみのとくださいまし多  
「能く來た擔いで呉れ 花「ハイと云ふのでこれのら擔させうのら久八和平も手傳つて擔さ  
ましたのら忽ち家の見へないやうに炭と積み上げ芽度婚禮と濟せて八右衛門は媒婚と共小  
別れて歸りませこれのら夜になると夫婦で商ひとしまそと多助の家へ嫁が來てこれくと  
云ふのら嫁と見ながら方々のら買に來ますこれのら商ひと仕舞て愈々床蓋と相なります  
多「芽度なア己ア斯うやつて眞の親父に貸つた紋付きの着物と着てお前と話しとするだア  
花「ハイくと恥のしるうな顔として居ります 多「誠に不思議な譯で己ア家へ嫁に來て己  
ア醜男で誠にどこと云て取り所も何もねへが己ア精神と見抜いてお前の親父様も呉れた  
のら末長く成るべいが夫婦は初見にあると云ふのら婚禮とする時お堅く約束としなくつち  
やアなれねへが己アやうな者でも亭主に持てば己ア辭と背のねへか 花「ハイ決して背さま  
せんが不束もので御座いますのら能く御用とお云ひ付けなそつて下さいまし漸く御膳は焚  
けるやうなりました 多「さまたつてあアお前と六十八十までも夫婦に成たらお互へに氣  
に入らねへ所が出來るどうも嫁も彼所は宜い此所が氣に入らねへどうも腹ア立つていけね



へと云へばね前も己ア旦那はさうも彼所はいゝが腹ア立つていけねへとの何との思ふ事があるものだがね互へあいけねへと思ふと一つ所に居るのぶ厭やになるらいいけねへ所は取て打捨つて仕舞て宜所へいで夫婦になつて居べいせいゝの 花「至極御尤もでは座いませ多さうサこれより尤な事はねへ底でお前は御用遣しの娘で計り炭屋へ嫁に来て味増減しと提ると云ふ心は此の多助が仇には思ひねへ已も死に身になつて働きたれ前も働いて此身代と大きくして人には云へねへが時節次第で少なくとも此本所半分は己れが地面にしべいと思ふのださうはいくめへが棒程願つて針程叫へたのら大きくやるべいや 花「ハイ」 多「うれには儼約としくつちやアいけねへ吝痴にするのじやアねへ儼約とそるた吝痴とは義理も情も知らねへで奉公人杯に食ふ物は喰はせず着る物も衣せねへで人と困らせても構わず無闇お金と貯るのと吝痴と云て極いけねへのでそれのら自分が一杯食ふ物と半分食て彼れは欲しい買ひてへと思つても堪忍してやれと云て半分にして置くそれが儼約の本だそれと天地に預けて置けば利が着附て来る其時は五枚でも十枚でも一時に着られるやうになるのら十年が間稼があるればなんねへ今に小兒でも出来ると骨へ折るのらしつゝのり遣て呉れ 花「どの

やうにも儼約と致しませ御膳は一度位にさせう 多「お飯はきんと食てもいゝのだ底で儼約がいゝと云ても明日が日死なねへものでもねへ其時此家へ来て芝居見物一ツ花観一ツしねへと思ふと思ふが死ねへものなら己が一遍は見せる花観でも芝居でも煙火でも何でも一遍は見ると美服も一遍は着せるが二度とはいけねへ一遍着たヨそれと駄目だと云なら今の中歸る方が宜早い方がいゝヨそれが氣に入らなければお前は縁致があつて何所へでも往ける立派なお嬢様だのら立派な所へ嫁に往くがいゝ 花「妻の立派な所へ往きたければ此方へ参りはしませんのらさうかお見捨なさらないでお置き下さいまし 多「見捨ると云ふ事はねへがまアだ氣に入らねへ事があるお前の着物の皆なあんに袖が長い彼の袖があれば小兒の着物が一つ出来る元じやアねへ 花「振袖物は皆な彼な長うは座いませ 多「彼の袖づけ元だのら彼れと錠で打切つて仕舞ふのら此處へ持つて来う 花「ハイ」と少しも逆らはず嫌な顔もしず松竹梅の縫模様の振袖と持て来ませと 多「これと打切るだアヨ己ア家じやア入らねへから 花「ア、申し旦那様貴郎は晝のらお働さでお草臥れて汚座いませうのら妾が致しますと云ひながら振袖と新割臺の上へ乗せて借氣もなくザッウリツと二つ



三つに切りました時は多助も思はず手と拍て 多能く切つたるれでこそ惣原の女房だ多助の家は此振袖の袂にあると云て大きに喜んで實に玉椿の八千代までと新枕とのはせ夫のら夫婦共移さし致しまして少しも油断としませんから忽ち身代と仕出ししましたに付多助は豫ての心願通り沼田の家と立派に再興致し分家の家も興まして今日まで惣原の家は連綿と致して居りまると又多助は江戸表に置きましても稼業に出精しまして遂に巨萬十身代となり追々に地所と買入れ廿四ヶ所の地面持とまでなり本所に過たるものが二つあり津輕大名炭屋惣原と世に誦はるゝ程の分限に數へられ其家益々富み榮えましたが只正直と勉強の二つが資本でありまるとのら皆様能く此話と味わへて只一通りの人情話と浮聞取りなされぬ様に願ひまると此話も餘り長くなりましたのら未だ櫻りのつゝね道連の小平と盲人のお龜親子の事などは惣原多助後 日譚として尙ほ追々お聞きに達しますと致しまして一先づ此所で打ち切りは致しまと長らくの間は愛顧に相成りました段は深く御禮と申上す

鹽原多助一代記大尾

明治十七年十二月十一日 版權免許  
 同 二十年 四月三十日 別製合本屆  
 同 二十二年四月廿九日 印 刷  
 同 五月一日 出 版

(正價五十錢)

日本橋區本石町二丁目十六番地

發行者 覺張榮三郎

四谷區四谷裏町四十八番地

演述者 三遊亭圓朝

神田區猿樂町二番地

筆記者 若林 珪藏

京橋區船松町十二番地

印刷者 梶山 尙三郎



有所權版



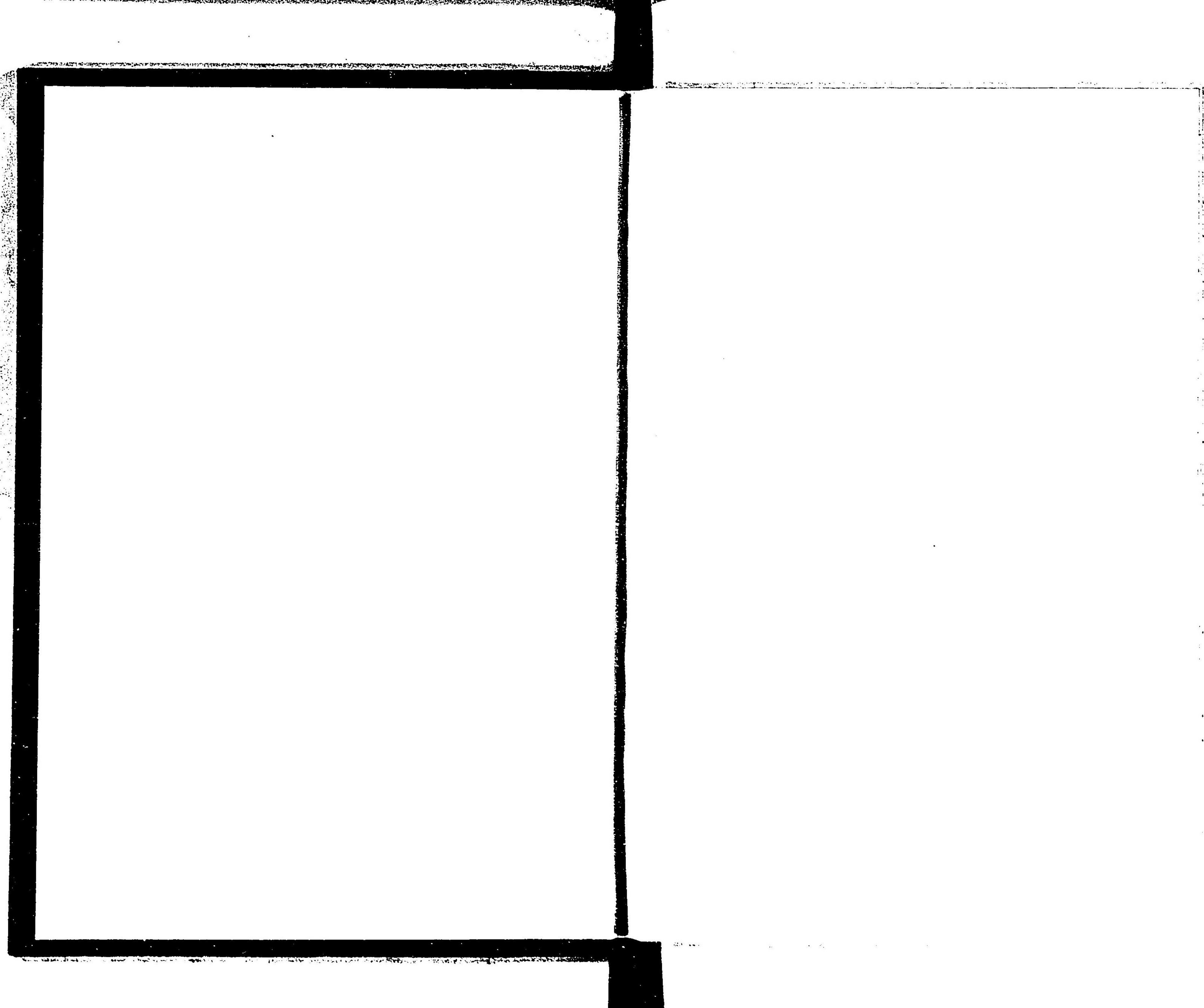
斗 27.86

茶 罐 意

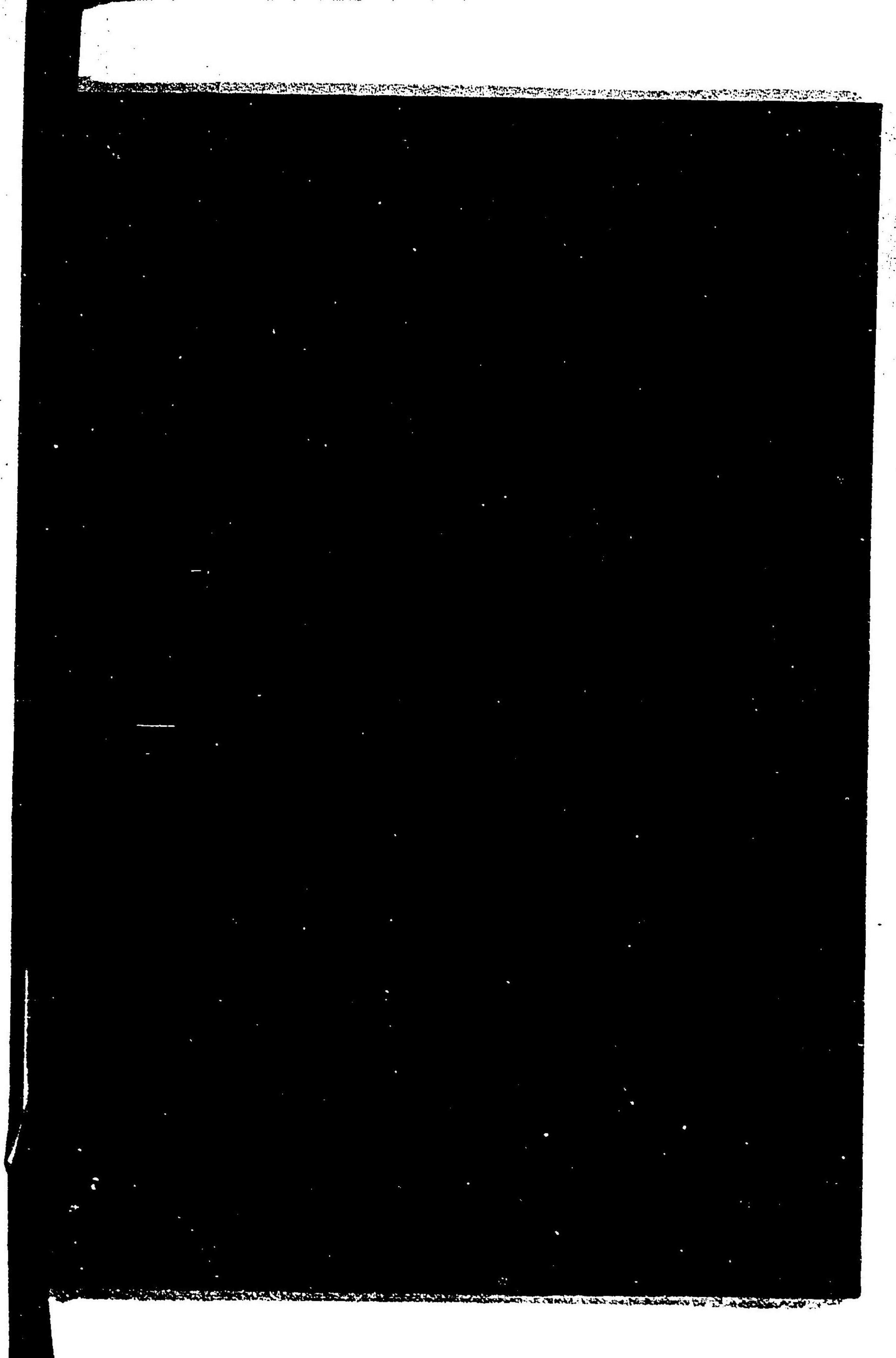














913.7

Sa 632s

098003-000-1

913.7-Sa632s

塩原多助一代記

三遊亭 円朝/演述

M22

DBT-0196





